
『仮 僕の七日間戦争』

FATE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『仮 僕の七日間戦争』

【Nコード】

N43230

【作者名】

FATE

【あらすじ】

僕の名前は拓己。どこにでもいる普通の中学生さ！ ある日僕は母親に相談を持ちかけた。

「そろそろ僕のお小遣いを上げてくれないか？」

その言葉から数々のドラマが生まれる。

生と死の狭間をさまようバカな主人公

怒り狂う強敵！

約束として渡された一枚の硬貨！

絶対絶命の危機！

それを守る大きな壁！

新たな宿敵！

そして最後に拓己を待ち受けていたものは……。

僕の七日間戦争 始まります……。。

1日目 戦争の火種

1日目

「ねえ、母さん？」

僕は台所で料理中の母親に後ろから声を掛けた。

「なんだい拓己たくみかい、どうしたんだ？」

すると母親は手を止め振り返った。台所の上には卵、小麦粉、パン粉の入ったボールが三つ並べられていて、まな板の上には豚ロースが並んでいた。

（今日はとんかつだな……）

僕は母親のお手製とんかつが好物だ。今日の夕飯を思い浮かべるだけで顔がニヤついてしまう。

「何アホ面出してニヤついているんだい？ バカな上にアホまでついちゃったら本当に救いようが無いね！ でっ、一体なんなんだい？」

ひどい母親だ、いつか訴えてやる！ おっとっと、そんな事より今はもつと優先するべき事があったんだ。

「あのお、お母様。今日は——」

『却下！』

早っ！ ってあれ？ 僕まだ用件を最後まで言っていないよな……。

「まだ用件言つて無いうちに却下しないですよ」

必死に講義したいがこの後の事を考えるとあまり強くは言えないな、ここはあくまでも笑顔でいこう。そうLOVE & amp;ピースだ！（注 ピースは書けない訳じゃないんだからね！）

「お母様、本日は7月の始まり、つまり1日ではありませんか？」

必死で取り繕う笑顔、何も代えがたい代物だ。その満遍の笑みで母親に促す。するとしかめ面で母親が口を開く、

『でっ？』

何てことだ、言い難いからお茶を濁したのに……。仕方ないことは攻め方を変えよう。

「お小遣いいい、早くお小遣い頂戴よぉ！　ねえママぁ」

今迄に無い位に身体を左右にくねくねしてみた。これで決まったな！　こんな可愛い甘えん坊を見捨てる母親がどこにいる。

『死ねっ！』

ここにいた！　しかも却下ならまだ親子の血は繋がっていたが、死ねと来たらもう他人以下だ。止む終えまいがここは実力行使でいかせて貰う！

「おいっ！　クソババア！」

『あっ？』

早い……。僕がババアと言い切る前に右手に包丁を持ったのと左手で僕の首根っこを掴んだのがほぼ同時、その後何の躊躇いもなく包丁の切っ先が僕の頸動脈を狙うのに瞬きの時間すら与えていなかった。恐ろしいと言う言葉が何より似合う。

「すっ、すいませんでした」

謝るという言葉は適切ではない、この場合は命乞いに近い。

「それでお母様、差し支え無いようでしたら今月のお小遣いを頂きたいのですが……」

すると溜息混じりに母親がカバンから財布を出した。なんだ最初から下手に出れば良かったのか、ふう。お小遣いを貰うのにも命懸けだよ。

―チャリン―

夕飯前の綺麗に片付けられたテーブル、輪を描くように目の前に転がる五百円玉……。あれっ？　僕のお小遣いは確か福沢さんが一人のはず、一万円はあったはずだぞ。決して玉ではない。うん、ここは講義するべきだ！

「おいっ！ ババ——」

僕の喉元から微量な流血の感覚。恐る恐る首元に目を向けると包丁の刃を伝って赤い滴が少量流れているのが見える。

—ポタっ—

あっ！ 床に滴が落ちる音がした。ああ、これは確実に刺さってるよ。でも不思議と痛みは無いな。ふむ、これがプロの仕事か、やるねえ。今では如何ほど刺さっているのか確認する事さえ怖くて出来ないよ。よしっ！

「すいませんっした。命だけは取らないで下さい」

アサシンという言葉を知っているだろうか。知らない人は僕の目の前にいる人がそうだよ。えっ？ 母親じゃないのって？ 違う違う、もうこれ忍者だよ、しかも上忍。江戸時代だったら殿様の暗殺とか命じられてるレベルだよ。

「それで、忍者マスター様。何ゆえ僕のお小遣いは五百円玉なのでしょうか？」

喉元から包丁が外された。そして飽きた顔の忍者が口を開いた。
「あんたは本当にバカだね。先月10日も経たずにお小遣い全部遣っちゃったでしょうが！」

確かに、言われて見るとそんな気も。ふむふむ。

「そのせいで先月は今月の分前借して生活してたでしょうが」

あっ！ 閃いた！ イヒっ！ ↑少し古いか（笑）確かに前借をお願いした。

「その分差し引いた結果。ソレっ！」

母親がテーブルの上にある五百円を指差す。そうかこれが僕の今月のお小遣いか……って納得できるかあ！

「ゴルア！ ふざけんなババア！ これでどうやって生活すんだよ！ こんな玉つころ一つじゃド〇クエで薬草も買えねえよ！」

全く理不尽な話だ。どの世界に中学三年生にもなった可愛い息子

に五百円で生活しろと言った。

『ほう。クソガキや遺言はそれで終わりか？』

えっと……。目がお据わりになつてらっしゃる……。あっそうか

！ 何だ、謝るしか無いじゃん！

「もう本当にすいませんでした、何か直ぐに調子に乗っちゃって。

もう謝る言葉さえ見つからない所存です」

無理無理、一月を五百円はさすがに無理だよ……。ここは何としても現金を手。

「ただお母様、私めも何分中学三年生にもなりまして色々とお友達付き合いもありまして、こう何かと入用で。もし宜しければお小遣い自体の値段を上げて頂く事は出来ないでしょうか？」

これ、これしか無い、見当たらない。どうせこのままじゃじり貧だし、ここはあたって砕けるだ！

「成程……。ふむ、貴様の言い分にも一理あるやもしれんな」

「やっぱしダメか……。つて、あれ？ 嘘？ マジ？ ちょういがあゝい！ こんな事でも言ってみるもんだね。」

「だがしかし！ 貴様の場合値段の底上げよりももっと大事な事がある。何か分るか？」

うゝん大事なことね。やっぱアレかな？ でもアレだと正直厳しい。でも小遣いの為ならもしかしたら頑張れるかも。よしっ！

「成績の事なら頑張ります！」

「それはずっ……と前に諦めた」

なるほど！ 懸命な判断と言えよう。だとすると後は何かな？

「わかりません！」

「だろうな……」

やはり忍者でも一応は母親だった。僕の頭の悪さは理解の範疇だったみたいだ。

「それは貴様のお金に対するだらしの無さ。まずはそれをどうにかしなければ小遣いを上げたところでまた同じ事の繰り返しだ！」

なるほど。さすがだ！ 納得の回答だ。

「Yes My Mam!」

「違う! それを言うならYes My Momだ!」

間違いないこの人は僕の母親だ。忍者ママだ!

「なので拓己には一つ条件を与える。そしてそれが出来たならばお小遣いをUPしてやろう」

何て寛大な人だ。新宿の母と並ぶくらいのお母さんだ!

「拓己。ちなみに新宿の母は占い師だぞ!」

何て事だ。心の声まで聞き取れるのか……。やはり凄腕の忍者だ!」

「でっ? どうする? やるか?」

もちろん二つ返事でOKだ!

「もち——」

「ちなみに条件をクリア出来なければお前の身体は……。そうだな、もうこの世に未練はないだろう、たんぱく質の塊に戻って貰おうか! うん、殺っちゃうよ?」

危ないところだった……。危うく二つ返事で答えてしまうところだったよ。それにしてもこの人はお茶目にサラッとなんてとんでも無い事を言うんだ、命賭けとなれば流石の僕も考えるさ。

「OK! 僕やるよお母さん!」

何て事だ、お小遣い欲しさに声が勝手に出てしまった。せめて条件を聞いてからにしようと思ったのに。僕の心と身体のシンクロ率はきつと0.3%以下だろう。これじゃあ汎用人型決戦兵器動かないよ!

「よし決まりだ! 条件は簡単だ、今日から一週間その五百円を使わずに持っている。来週つまり7月8日になった時点で五百円が手元になれば小遣いUP。無ければたんぱく質だ!」

一週間持ち続けるだけならいくら僕でも大丈夫だろう。よしっ、楽勝だ!

「うん。僕、頑張るよ母さん」

「そつか……。短い付き合いだったな拓己」

えっ? 何その柔らかい物言いは、この人僕じゃ出来ないと思っ

てるよ。っていうかそれならまだしも確実に殺ろうとしてるよ！

確かに殺っちゃうよ？ 何て簡単に言う人だし、でも母さんがそう来るなら僕は必ずやり遂げて見返してやる！ っていうよりも、やらなければ殺られる。

「ふっ、僕は本当はやれば出来るって事証明してあげるよ」

「ほう。来週に同じセリフが吐けばいいんだがな、間違っても女々しい命乞いだけはするなよ」

クッ、いきなり最終手段の命乞いを封じられた。さすがだ、もうやらなければ確実に死ぬ……。忍者ママは一度した約束に関してはかなり五月蠅い、頭の中からもしかしたら生かしてくれるかも、何ていう甘い考えは捨て置いた方が良さそうだな。

「ふんっ、この僕が命乞い何てするわけ無いだろう母さん。逝く時はあっさり逝くさ！ それにこの五百円を使わなければいいだけの話だしね……。んっ？」

あれっ？ でも例えば落としたりしたらどうなるんだろう？

「あのー、母さん？ 例えば何だけど、この五百円を落としたりした時には如何なるのでしょうか？」

「無論。前言に撤回は無い！ 手元になければ例えどんな理由であろうと殺っちゃうよ！」

さすがだ。例えば血を分けた息子であろうとその辺に容赦は無いと言う訳か。ならば最悪は誰かに借りてなんとかしよう。そうだその手があったよ。圧倒的閃きだっ！ ふんっ、このクソババアが、この試合、僕の華麗な頭脳を見誤ったババアの負けなようだな。

「尚、硬化の偽装は許さない！」

僕が勝ち誇った顔をしていると忍者ママはそう言い、目の前にあった五百円を親指と人差指で強く握った。そしてそのまま僕の前に差し出した。僕はクエスチョンマークを浮かべながらそれを受け取った。

バカめ偽装は許さないだと。ふんっ、そんなもの予め作られた年と同じものを友人に用意してもらえば何の問題はないさ。揺るがない、

今回の僕の勝利は揺るがないぜおっ！ んっ？ あれっ？ おかしいな……、

「っな、なんだとおーっ！」

僕は受け取った五百円に激しい違和感を感じた。なんて事だ……、違和感の正体はこれだったのか。僕は手にある五百円に目を向けた、するとそこには先程地球外生命体が親指で握った場所にクツキリハツキリと指の指紋がついていたのだった。

なんて事だ何をどうすれば五百円の元であるニッケル黄銅に指の力で指紋を刻む事が出来るんだ……。駄目だ僕の実験的な閃きは圧倒的な力によってねじ伏せられた。

「必ずこの指紋が刻まれた五百円玉を7月8日に手元にもって置くこと。それ以外拓己、貴様に生きる道はないと思え！」

ちっ！ 今の奴を敵にしたことが間違いだったか。くっ！ もうこうなれば後はやるしか道はないか。

「今にみてるよお！ 絶対に、絶対にやり遂げてやるからなあ！」

こうして僕の七日間にわたる生死を賭けた戦争の火種が出来た訳だ。

2日目 悲劇！ 解き放たれたバナナと硬貨

二日目

―7月2日 16時00分―

お小遣いUPまで後六日。現在の所持金 五百円

「いやあ、僕って本当はやれば出来る子なのかも」

学校からの帰宅途中、僕は自分のあまりの出来る子加減に浸っていた。何故ならば放課後クラスメイトからの誘いを全て断る事が出来たのだから。

「皆には悪いけどさすがに遊びに行っちゃうとお金遣っちゃうしな。それにしても喉が乾いたよ」

家まで後5mというところで僕は立ち止まってしまった。さすがにまだ本場の夏とは言えないけど7月の2日にもなれば気温は高い、それは喉の一つも乾くだろう。

「えーっと、今日はどっちのコーリヤにしようかなあ」

僕の家の向かいには自動販売機がある、そしてそこには僕の大好きなコーリヤが売っている。財布から五百円を出してっと。

「うーん。どっちにしようかな？ やっぱりせつかくだから+150の方がいいかなあ？」

そしてこの自動販売機に置いてあるコーリヤには何と通常サイズの350mlと増量の+150mlの二つがある。何故それで悩むのかというと僕が好きなのはコツカ・コーリヤZEROの方なのだ。そしてココには350mlのZEROと500mlの通常コーリヤが置いてあるのだ、なので日々どちらにしようか迷うのである。

「じゃあ今日は好きなZEROの方で！」

その時僕の中にある自己防衛本能がフルで稼動した。そのおかげで五百円を入れる一步手前で手が止まった。

「って、アブねえ」

今のは完全に危なかった。なんて事だ危うく自販機の中に硬化を入れてしまうところだったよ。家の前にこんな伏兵がいたなんて、あっさりタンパク質の塊になるところだったよ。さて指紋付き硬化を財布に戻してっと。

「ああっ！」

―チャリン―

―コロコロ―

「ぬうをおおおお！」

何て事だ！ よりにもよって自販機の下に落としてしまうなんて今の僕にとってこの五百円は命そのもののなのに、それをあんなにも簡単に。くうく頼む頼むから近くに落ちていてくれ。

僕は恐る恐る自販機の前に跪き死の恐怖と対面しながら五百円の所在を確認した。

「あつ、アベシーっ！」

なんて事だい、よりにもよって見つけ出した僕の命は少し奥の方に転がっていた。届くか？ 否！ 届かせてみせる。自販機の前に仰向けに寝そべり腕をゆっくり奥へ進める。

「あつ。えっ？ うそっ！ マジで！」

僕の手は肘の部分でその進行を止めた。かすかに触れる五百円の感覚……。ダメだ、やるしか無い。僕は覚悟を決め手を伸ばした。

「どりゃあああ！」

痛い！ 地面と自販機で擦れる皮膚。きしむ骨。だがドレもコレも命には変えられない。僕は最後の力を振り絞った。

「へーっ！ いっ！」

中指の爪の先が五百円を捉えた。よしっ！ ココからは丁寧に、慎重に、赤子を産湯に浸けるように、初音。クのフィギュアを買いに行く時にクラスの皆に見つからないようにコッソリ行くくらいに慎重に、エロゲの選択項目の時、本当はあっちの幼女がいいんだけど、でもこれはひっかけだね！ 本当は敢えてココで他の子を選ぶのが本線！ くらい丁寧に。

「よしっ、獲ったどーっ！」

僕は自販機の下に手を入れながら声高らかに叫んだ。爪の先から指の先、そして指で挟んだこの五百円。僕は歓喜した、歓喜のあまり涙が溢れた。

「心配かけやがって、こいつめっ！」

僕は立ち上がり少し汚れの付いた五百円を丁寧に指で拭いた。クツキリ指紋が刻んである間違いないあの五百円だ。気付けば市役所から18時を知らせるチャイムが聞こえていた。僕は自動販売機と二時間近くにわたる戦争をしていたのだ。

「おっと、ヤバイヤバイ。そろそろ母親が帰ってくる時間だ」

慌てて制服に付いた埃を払う。もし、一日と経たずに落としてしまったっ！ なんて事が知られた日には……、まあ特に何がある訳でも無いけど、知られて得することも無いしね、出来れば知られない方がいいからね。

「おう！ 息子よ、そんなとこで何してるんだい？」

危ねえって！ 間一髪だよ。うちの母親タイミング良すぎだよっ！ 危うく知られるところだったよ。

「いやちよつとね。母さんの出迎えでもしようかと思って」

僕、ナイっスう！ このとっさの緊急回避さすが天才だね」

「ほう成程。それは出迎え大儀であった。ならば褒美としてコレをやろっ」

すると母親が買い物袋からバナナを二本手に取り出した。そして一本を僕にもう一本を自分の口に運んだ。

「ほう、どうやら一日で命が尽きることは確定しなかったようだな」

母親は僕の右手に握った五百円を見つめた。あつ！閉まうの忘れてたよ。

「モグっ、モグ。ごくん。だが拓己よ、そうやって手に持っている
と直ぐ無くすぞ、早く閉まっておけ！」

バナナを全部食べ終え、一言僕に忠告をすると家へと帰っていった。ふう、僕は額に流れる冷や汗を拭いた。そして財布に五百円を
閉まいながら母親の後を追った。

――ツルっ！――

「ババああああ！」

今の時代にソレって。僕は落ちていたバナナの皮に足を滑らせた。
あのババアは事もあるうに家の前にバナナの皮を捨てやがったんだ。
そのせいで財布に入れようとした僕の五百円は勢い良く僕の手元か
ら離れていった。

「ああ、待っておくれ。待っておくれよ君はドコに行ってしまう
んだい」

転がる五百円を目で追う。かなりの勢いが付いていたのかコロコロ、
コロコロと僕の思いとは裏腹に止まることなくその五百円は転
がる。そして僕は転がる先を確認した。

「やめろ！やめてくれ！やめるんだ、そこだけはああああ」

僕の願いは届かず家の向にある自動販売機、つまり先程僕に苦痛
を与えたあのギミックだ。その下へと五百円は転がっていった。

――チャリりん――

「チップイン！ってゴルフじゃねえよ！」

円を描きながらその五百円は動きを止めた。僕は地面に拳を叩き
つけた。痛かった。すると騒がしくし過ぎたかババアが玄関を開け
僕を睨みつける。マズイ……、バレたか？

「バカ息子。そこで何してるんだい。早くお入りよ」

玄関の扉を開けババアが僕が入るのを待っている。よしっ、五百円の事はバレていないようだ。だがしかし、このまま五百円の所在をちゃんと確認せずに中には入れない。だが、かといってババアに先に入ってて、何て言ったら怪しまれるだろうし。どうしたもんか……。イヒ！ そうだコレだ！

「母さん、ちよつと見ててね」

そう言う僕と僕は右に自動販売機その距離5m、そして左に母親その距離2mの位置にポジションをとった。そしてその場に腰を少し下げ中腰の体制をとった。

「リーリーリー」

そして抜き足で自動販売機の方に少しづつ寄っていく。そう、これは野球の盗塁だ。そして母親にチラ見で合図を送る。すると母親はため息を尽きながら僕にノってくれる。

「はあ、ほんとに何がしたいんだか。ほらGO」

ババア 監督の掛け声と共に自動販売機へと駆け出す僕、そして手前2m。今だっ！

「ザーっ」

自動販売機に見事な、それは見事なヘッドスライディングを決める。そして直ぐさま五百円を探す。

「アソコだっ！」

僕は目を光らせ五百円を見つける。ちっ、さっきよりも少し奥に行ってしまった。だが見つかって本当に良かった。僕は安心してその場に立ち上がる。後はババアだけだ。

「どうだった？ 僕のヘッドスライディングは」

玄関の前に立つババアに笑顔で問いかける。バレて……無いよね？

「はあ、バカは死んでも治らないね。いいから早く入りなさいバカ息子」

どうやら危機的状況をなんとか回避できた様子。だがクリアではない。そうなぜなら僕の手元には五百円玉が無いのだから。そして僕は家に入り二階にある自分の部屋に駆けつけた。

「ふう、さつきは何かあったけどこの先どうしようか。うん」
僕の部屋は二階の正面にある、そして窓も道路側についている。つまり窓を開けると自動販売機が見えるのだ。そして僕はその場に座り込み自動販売機を見つめながら知恵を絞った。

「拓己の思考内部」

まずはこの世界には三つのルールがある。たった三つしか無いルールが互いに干渉しあい、この地獄絵図を作り出している。

ルールX

「五百円玉」これは中でも至ってシンプル。そう自動販売機の下にあるソレを何とか7月8日を迎えるまでに取り戻さなくてはいけないと言うこと。それがなせないあかつきにはもれなく僕は死ぬだろう。コレがルールX。つまり今こんな事を考えている暇があれば直ぐにも五百円を取りに行くべきなのだ。だがココで絡んでくるのがルールYの存在。

ルールY

「母親」これが中でも一番厄介。というよりこの地獄絵図の源。今のところ五百円を落とした事はバレていない……と思う。もし知られても何がある訳では無いが……、とも言いきれなくなってきた。良く考えればあの母親の事だ、我が子を愛すが故にとか言って、最悪五百円を取り出す妨害をしてくる可能性だってある。なので忍者

には絶対に知られてはいけないと言う事、よって忍者が自宅に居る間は下手に動けない。ただ幸いな事に忍者にはお勤めがあるので、僕が学校から帰ってから忍者の帰宅する間でなら行動が出来ると言う事だ。つまり限られた時間で忍者の目を避けて動かなければいけないこれがルールYだ。

ルールZ

「自動販売機」そして最後のルールZ。これはつまり自動販売機の下に手を入れても狭くて届かないという事だ、まだ手を入れてないから正直どんなものは分からない、ただ目測が未誤っていなければ間違いなく苦戦を強いられるだろう。正直致命傷だ。

何の因果がこの三つのルールに縛られた状態で僕はこの惨劇を回避しなければいけない。

「何か使えるモノはないかな？」

僕は明日の戦に備え部屋中にあるものを探し周る。そしてある程度の段取りを組んでその日は眠りに就いた。

3日目 決戦！ 自動販売機！！

3日目

―7月3日 7時30分―

お小遣いUPまで後五日。現在の所持金 0円。

「行つてきまーす」

僕は勢い良く玄関の扉を開いた。そして家を出ると向かいにある自販機の前で立ち止まった。

「見てろよ。今日は貴様を四十八手の責めで攻撃して、ヒイヒイ言わしてやるからな！」

ビシッと僕は自販機を指差しその場を後にした。昨夜寝る前に考えた幾通りの手段を思い浮かべながら。

―7月3日 15時00分―

「待たせた。とは言わないぜ」

帰宅後汚れてもいいようにジャージに着替え自販機の前に再び立つ僕。待ってましたと言わんばかりに、

―ブーっ―

と唸りを上げる自販機。お互いが必殺の間合い。そして僕は後ろ手に持っていた胸元位の高さの通常より長いほうきを前に出す。

―第1R 自販機 S ほつき 15時30分―

「まずは必殺の一手目。いつきまーす、っとその前に確認っと」
自販機の前に跪き下を覗く。

「ええゝ。ええゝ。そこにありましか。あれっ？ でも気のせいかな
ちよつと昨日より動いている気が……。まっ、いつか」

そして五百円のご健在を確認すると三度僕は自販機の前に立った。
少し高揚している自分の気持を落ち着かせる。当然だ命を賭けた勝負だ決してミスは許されない。ゆっくり深呼吸を重ね精神統一する。
よしっ！

「拓己、いつきまあゝす！」

掛け声と共に跪く。そして自分の目——特殊スコープで目標を探す、ロツク！ 目標を11時の方角に補足。拓己どうする……。
（注 自問自答）。よし右手——右射出口よりほつき発信。震える右手を押さえながらゆっくりとほつきを奥へと進める。

——クネっ——

んっ？ ちよつと固めのゴム製のケーブルを押したような感覚が……。僕はほつきの先を確認する。

「なっ、何だと。ちっ、自販機め防御壁を用意していたか」

この戦、意外と簡単に事は終わると踏んでいたがそうもいかないみたいだ。奴は僕の頭脳をおバカと過信せずに事前に対策を取っていたのだ。

ちっ、だがココで無理をしてコードが目標にぶつかりさらに奥にいつてしまつては元も子もない。残念だがココは一旦引こつ。客員に告ぐ一旦ほつきを下げろ！ これは命令だ！ 僕はしぶしぶ右手を引いた。

「やるな。今回は手程の技術が無かつたほつきこと我々の負けだ。だが貴様に次の攻撃を防ぐことが出来るかな？」

僕は不敵に微笑みその場から一度去る。

―第1R 自販機 WIN（防御壁） 16時00分―

そして僕は家から特殊兵器を持ち出し再び自販機の前に立ちはだかった。

「貴様にこの新兵器が防げるかな」

僕は自販機を指差し。会心の笑みを浮かべ右手に持った 字の磁石を前に出した。

「これは先程のほうきと違って 字形だ貴様の防御壁などいとも簡単に抜くぞ、覚悟はいいな！」

―第2R 自販機 S 字磁石 16時10分―

「拓己、出るぞ！」

先程と同じ手順。 ゆっくり深呼吸をし精神統一。僕はやれば出来る子、僕はやれば出来る子。 よしっ、行くぞっ！

「うおりゃああ！」

つと掛け声とは違い行動はゆっくり落ち着いてと。 まず跪く。そして右手にU字磁石を装着。 安全装置ロック解除。 右射出口より磁石出ます。

（ゆっくり……。 ゆっくり……）

小声で呟く僕。 そして磁石は自販機の下に入っていく。

―力チっ！―

「しまっとうああ」

磁石は自販機下、入り口10？ 辺りで上にくっ付いた。 まさかの予想外……。 だがしかし一回くらの失敗で挫けられるか。

「まあ待て。 今のはほんの練習、小手調べだ。 仕切り直させてもらおう。 ううん、んっ、あ、ああ。 よしっ、拓己いっきまあゝす！」

先程とまた同じ——以下同文です。よしっ、行くぞっ！ もう失敗は許されん。

「死にさらせえ〜っ！」

さっきの失敗、たつたわずかだがあの行動で大方磁石の動きは熟知できた。そして自販機の対応も一度は見えている、大丈夫だそれら全の情報の統合これで抜けない壁は無いっ！

（よしっ！ ゆっくり……。 ゆっくり……。 と。今度はくっ付かないように）

小声で呟く僕。そして磁石は自販機の下にまた入っていく。今度はくっつかないように最新の注意を——

——カチっ——

「どないせいつちゆうんじやい！」

僕は磁石を取り外しその場に立ち上がり思いっきり地面に叩きつけた。右足の小指にあたった。

「うー、うー」

その場に転がる事1分ようやく痛みが引いてきた。だがもちろん涙目だ。

「貴様！ 自販機めよくも僕をコケにしてくれたなっ」

その時、僕の背筋を鋭い稲妻が駆け抜けた。まさか……。 まさかとは思うが……、

「っ貴様！ さてはこうなる事が分っていたのか？」

——グーっ——

まるで返事をするように自販機は唸り出した。

「まさか、まさか貴様が策士だったとは、成程それなら納得だ。この勝負、貴様をただのギミック無勢と侮った僕の負けだ、認めざるおえないだろう。だがしかし、だがしかし僕の次の攻撃それをはた

して貴様は受けきれるかな？」

そう僕には最大の武器があった。相手が三国時代の英雄 諸葛孔明 並みの策士だと分れば此方も出し惜しみは出来ない。僕はその武器を取りに行く為に再びその場を後にした。

―第2R 自販機 WIN（右足の小指U字磁石攻撃+拓己の頭の弱さ） 16時00分―

「先程は多少の計算ミス、そして最大の敗因である僕の過信に命を救われたな自販機めつ。だが貴様に次の武器、そう、この生物兵器を防げるかな？」

すると僕はロープに繋がれた生物兵器を前に出した。どうやら自販機もこの兵器には怖気づいたらしい。唸る事も出来ないみたいだ。「はあゝっはっはっ。まあ怯えるのも無理はない。誰でもこの生物兵器を目の前にすれば逃げたくなるものだ。さあ行け！ 生物兵器 ペス！」

「わおおおん！」

生物兵器名	ペス
種類	オス犬
年齢	2歳2ヶ月
好きなもの	金髪幼女
嫌いなもの	バカな主人
今はまってるもの	洋物の無修正
最近気になること	パイレ。ツの二人の行方
将来の夢	娘とお医者さんごっこ
座右の銘	一日一膳

―第3R 自販機 VS 生物兵器 ペス 17時00分―

「ペス！ 目標はあの下にある五百円だ」

僕は自販機の下を指差す。するとペスがまるで、

「まかせときな、旦那！」

とハードボイルドに頷く。（注 ように見えた）

「ふっ。短い付き合いだったな自販機。うちのペスが本気になった以上貴様に勝ち目は無いは。さあ、取り出せペスっ！」

「ワぁんっ！」

普段は少しおとなしめのペス。だが事ご主人の命令が下ればその動きは機敏、そう僕とペスはそんな友情にも似た信頼で結ばれているんだ。そしてペスは僕のピンチには必ず結果を残してくれる。まさに最高のパートナーだ。けどどうしたんだろ？ ペスの様子が少しおかしい、さすがのペスもこのギミックの策に中々動き出せないのか、

「どうしたペス？ 苦戦しているのか？」

自販機の前で力むペス、その身体は少し震えていた。さすがのペスでも少し厳しいか？ するとペスは後ろ足を縮めその場にお座りをし、辺りを見渡し始めた。

「はっ！ そうか、ペスすまなかった。僕とした事が気付くのが遅かったようだ」

ペスは気高く誇り高い犬だ。そんな自販機の下を漁るなんてはしたない真似は絶対に出来ない。だけど今回は僕の命令。そうペスは誇りの高さゆえに僕の命令にはどんな事でも従う、だがさすがに人前でその醜態は見せたくないのだろう。辺りに人がいるか探りタイミングを計っていたのだ。そうと分れば僕も少し影に隠れよう。そして僕は家の塀の後ろに隠れペスの様子を影ながら見守った。

「ペス。君は最高のパートナーだよ！」

するとペスは再び力み始めた。きつとタイミングが合ったのだろう。後は自販機が隙を見せた一瞬でペスは五百円を取り出すだろう。そして時を待たずしてその瞬間が訪れた、後ろ足を少し上げ中腰の体制をとったペス。

「いつ、行くのか、ペスっ！」

僕は深く拳を握り、目を見開きその一部始終をこの目に止めようと集中した。だがそんな僕の予想を遥かに上回る速度でペスが動いた。

「わぁーおおおん！」

一瞬、本当に一瞬の出来事だった。僕の目でも終えないそんな速度でペスは仕事を終えていたのだった。僕が気付いた時にはペスの足下にはう○こが落ちていた……。しかもよく見ると綺麗にとぐろを巻いた感度の高い一級品。さすがペス、一筋縄じゃいかない犬だ。

「こおのバカ犬があ！」

「ヴァウ！」

尻尾を振って僕にオシリを突き出すバカ犬。僕が死刑になった時にはコイツも道連れにしよう。僕は深く心の奥に刻み込んだ。

「違うペスっ！ よく聞け、いいか、あの下にある五百円を取るんだ！」

「ビャウ、ビャウ！」

憎たらしく微笑むような顔をするペス。殺したい。ペスをじゃ無くこんなバカ犬に期待した僕を殺してやりたい。

「はぁ。もういいよ、家に戻るぞ」

「ワン！」

そして僕は家からシャベルとゴミ袋を持ち出しバカ犬の後始末をした。

—きんこんか〜んこん—

僕が片付けを終えると18時のチャイムが鳴り響いた。それと同時に僕の初日は惨敗に終わった。

—第3R 自販機 WIN（ペスの暴走＋後片付けによるTIME UP） 18時00分—

そして僕は二階の窓の前に座り自販機を見ながら明日の作戦を立て直した。

「今日の敗因はやっぱりあれだな、そう僕が自販機を舐めていたことだっ、となれば……。よしっ、明日はそれも踏まえた上でリベンジを決めてやる」

僕は部屋中のありとあらゆる道具の下見をしてその日は眠りについた。

4日目 決戦！ 自動販売機！！ 拓己覚醒！！！！

4日目

― 7月4日 7時30分 ―

お小遣いUPまで後4日。現在の所持金 0円。

「行つてきますっ！」

僕は昨日と同様、家を出ると自販機の前に立ち止まった。ただひとつだけ違う事もあった、それは今日の僕に慢心がないという事だ。僕は神妙な面持ちで少し口を開いた。

「昨日は正直に僕の負けを認めよう。だが、今日の僕を昨日の僕と思うなよ。これは忠告ではない、この僕をココまで追い込んだ貴様に送る敬意だと思ってくれ。だが今日は最初から全力で行く、お互い悔いの残らない勝負をしよう。それじゃあまた放課後」

物腰静かな宣戦布告、だが僕の中の闘志は正反対に燃えたぎっていた、それと今の僕、少しかっこよかったんじゃないかな？ そんな事も思っていた。

― 7月4日 15時00分 ―

今日も真っ直ぐに家に帰りプラグスーツに着替える僕。今日の作戦にはかなりの自信があった、その自信は身体から表に出ていた。僕は凜とした表情で自販機の前に立ちはだかる。そして、とても落ち着いた声でこう言う、

「自販機よ！ 先にトイレに行っても言いかい？」

身体から表に出ていたのは自信ではなく、肛門から少し顔を出そ

うとしているダークマターだった。飽きたのか自販機はノーリアクション。やばいツノが少し顔を出してるよ……。

「ちっ、沈黙もまた答えと取ろう。暫しまたれえい！」

僕は肛門括約筋をフルに働かせトイレに駆け込んだ。そして便器に座り一息。そして全パルス開放！ 主砲ダークマター放てえ！

—ちゃぽん—

水の跳ねる音が響いた。

「ふう〜。よしっ！ 開戦の合図は鳴った！ 出陣だ！」

丁寧にオシりをビデで洗浄をしア。ゾン価格 498円のスコッピィ フラワー 12ロール（ダブル）で拭く。そして奇襲の為に予め用意しておいた武器を装着し家を飛び出す。

「うおおおお！」

まるで地鳴りのような声を上げ、疾風の如き速さで自販機の前に進む。そして右手に持っている奇襲用武器を大きく振りかぶる。

「ちえ——。っと、その前に五百円の確認をしなくちゃ」

振り上げた右手を下ろし自販機の前に屈む。え〜っと確か昨日はあの変に……。

「???」

やはりおかしい。若干の差だが昨日の位置から少しずれている気がする……。しかも五百円の位置だけではない。その前に張り巡らされている防御壁にも若干のズレが……。まさかつ！

「貴様、自販機めっ。僕が寝ている間に陣形を立て直しやがったな」これはかなりの盲点だった。自販機の奴がまさか体制を立て直して来るなんて考えてもいなかった。そのせいで今日の作戦に多大な影響——は無かった、特に影響無し。今日の作戦には全然関係ない事が判明した。

「ふっふっふっ。貴様の作戦申し分無しっ！ だが僕には一步届かない。そう僕は五百円の移動も頭に入れて昨日の夜作戦を立ててい

たのだから。惜しかったね自販機君、着眼点は良かったが詰めが甘いよ！」

そして僕はさっきまで右手に隠し持っていた武器の先を自販機に突きつける。

「自販機よ、僕は今から貴様にこの武器で奇襲を仕掛ける。はたして貴様にソレが防げるかな？」

えっ？ 何？ 奇襲の意味を知ってるかって？ ……。そして僕は右手に持った小さい手持ち用のスコープで自販機の下を狙う。

―第1R 自販機 VS スコープ 15時45分―

「どうだ、怯えて声も出ないだろう。今からこの鉄のスコープで貴様の下を掘り、腕を入りやすくするのだ」

すばらしい作戦に浸りながらも僕の目は自販機の下、目標から目を離さない。そして奇襲に怯んでいる今、僕は行動に出る。

「せえ〜っいっ！」

スピード、体重、ハートの強さ、スコープのメーカー。どれも申し分なし、それらの力を駆使し身体のパネをフルで活用した全力の一撃が地面へ向け放たれる。

「くたばりやがれえーっ！」

―カーン―

「しっ、痺れるぜ！」

僕の繰り出した全力の一撃は見事にアスファルトの地面を掘る事無く突き立った。そして全力の反動がスコープを伝って僕に返ってきた。

「くうお〜のお〜、忌々しい奴め。まさか僕の奇襲を予んで地面をオリハルコンで固めるとは。くっ」

何たる奇策、全くもって敵ながら天晴れだ。僕は先の少し曲がつ

たスコップを手に家に戻っていった。奇襲失敗だ。

――第1R 自販機 WIN（オリハルコン製の防御壁） 16時10分――

僕は家に奇襲用の武器を置き、代わりにあの生物兵器を連れ出した。

「おいっ、自販機。貴様は無知ゆえ知らないだろうから説明してやる」

そう言いロープに繋がれた生物兵器 ペスを前に差し出す。今日のペスはどうかややる気満々みたいだ、勢い良く前に出て行くペス。 「これこれ、あまり自販機を虐めるで無いぞペスよ！」

意気揚々と逸るペスをなだめる。睨みつけるように自販機を見るペス。今回はどうやら本気でいけそうだ！

「自販機よ先程のスコップはお主の知略に負けた。だが知は圧倒的な力の前では無力だと言う事を知れっ！そしてこのペス、彼ら犬族のこと掘ると言う能力にかけては右に出るものはいないだろう。さあ自販機よ懺悔の時間だよ」

――第2R 自販機 VS 帰って来た生物兵器 ペス 16時20分――

「さあ、ゆけペス。あのオリハルコン製の地面を掘り進め」

その言葉にペスは大きく右手を振りかぶる。そして同時に僕の指示した場所を目掛け全力でその手を振り下ろす。これで終わりだ自販機めっ！

「わぁおっん」

――パシっ！――

ペスの大きく振りかぶった一撃は地面を掘ることは無かった。おかしい……、いくらオリハルコンと言えどあのペスの一撃を喰らったらタダではすまないはず……。はっ！　そうかペスっ、気持ちは分かるがそれでも誰かがやらなければいけないんだ。

「いや、ペスよ気持ちは分る。お前もこの自販機のお世話になった事もある、それを思い出してしまえば全力では攻撃出来ないだろう。だが今の奴は落ちた、敵になってしまったんだ。もうあの頃の僕らに笑顔でジュースを売ってくれる彼はいなくなってしまったんだ。だから、だからこそ僕達の手で彼を討つ、討たねばならないんだ。それがかつて友だった僕達の務めなんだよ」

ペスは何かを振り払うように首を振る。そして覚悟を決めた者のみが出来その表情を浮かべ右手をもう一度大きく振りかぶる。

「さあペスよ、僕達のこの因縁を今こそ振り払うんだ。自らの手で」
「ばあおくんっ！」

―バスっ―

そしてペスは振り下ろした右手を庇いながら家に戻っていった。オリハルコンに全力で叩き込んだんだ、あの右手はもう使い物にならないだろう。僕は敗れたペスに一言も告げずにその背中を見送った。ペスはやれるだけやったと心に刻み。

（ありがとうペス。君の事は忘れないよ）

―第2R 自販機 WIN（ペスの右手の負傷） 16時25分―

「よくもっ、よくもペスを。今迄は僕だけだったから容赦したものを、だけど今みたいに君がペスや僕の周りの人を傷つけると言うのなら、もう僕は容赦はしない。待っている40秒でかたをつけてやる」

僕は滲んだ涙を振り払った。これはペスを哀れんだ涙ではない。

僕はまだ心のどこかで自販機を友だと思っていたからだ。だけど今の僕にもう迷いは無い。家に帰り倉庫を漁る。そして見つけるのに多少てこずったが、禁断の兵器ここは マルテアウエポン と名づけよう。僕はそれを手にし再び自販機の前に立った。

「今の僕にもう迷いは無い。いでよマルテアウエポン！」

声高らかにその名を呼び、右手に持っていたその禁断の兵器をかざした。そうマルテアウエポンという名の金属バットを。

―第3 R 自販機 VS 禁断の兵器 マルテアウエポン（金属バット）17時00分―

「かつて友と呼びあつた者よ……」

僕は零れる涙を振り払いそのバットを大きく振りかぶった。狙うは一点。そして一直線にその場所目掛け全力でバットを解き放った。

「さよなら……」

僕の目掛けたバットは勢い良く持つ方を先端に自販機の下に入っていた。そして丁度いい頃合いで進行を止めた。

「いくよ。僕の最終奥義っ！」

そしてバットを持つ手を思いっきり上げた。

「コンチクショっ！」

僕の最終奥義、別名テコの原理。だが、さすがの重量だ簡単には自販機は浮かなかった。

（クッ。ダメか……）

諦めかけたその時、ペスの顔が脳裏を横切った。そうだ僕はこんなところで諦めちゃいけないんだ。散っていったペスの為にも。

「上がれ、上がれ、上がれ、上がれ！ 上がれえ！」

その時、僕のシンクロ率は過去に見た事の無い領域へと上がっていった。

―ドクン―

（旦那、旦那っ！）

何処からか声が聞えた気がした。

「ペス、ココにいたんだ。ペスっ！ ペスっ！ 分ったよATファイ——金属バットの意味。僕を守ってくれてるっ！ 僕を見てくれるっ！ ずっとずっと一緒だったんだね。ペスっ！」

——ドクン——

「うおおおおおおお、りやあああ！」

僕は暴走を通り越し覚醒した。その結果、通常ではありえない程の力が漲った。そして僕の全力全開の持ち上げにより自販機は少しその巨体を浮かした。よしっ！ これならいける。後は浮いて入りやすくなった自販機の下に手を入れて五百円を取り出せば！

「……」

「……」

「……」

「って誰が取るんじゃない！」

僕の作戦は完璧だった、まさに非の打ち所が無いとはこういう事だ。だがしかし、僕の知略は自販機の作戦に敗北した。まさかココに来て昨日の夜の行動、そう自販機による陣形の建て直しが響いてくるとはまさに不覚だった。

「まさか、ココまで予想していたとは……。さすがだ自販機っ！」

僕の身体は活動限界を迎えた。この勝負、決して僕の作戦ミス（注 頭の悪さ）では無く、あくまでも自販機の昨夜の作戦による敗北だった。もう一度言おう。この勝負はきつと色んな事が上手く重なり合った結果、昨日の夜に陣形を立て直しておいた自販機の勝ちであって、決して僕の頭の悪さでは無い。

—— 第3R 自販機 WIN（僕の頭の悪——自販機の作戦勝ち）

18時00分――

――きんこんかんこん――

雌雄を決した末、僕の敗北が決まると同時に18時を告げるチャイムが鳴り響いた。

「ちっ、時間か……。ふっ、ゴングに救われたな」

僕は捨て台詞を吐き、母親が帰ってくる前に禁断の武器を倉庫に片付け家へと帰った。そして二階に上がり窓から憎き宿敵を見つめる。

「くそっ！ 覚醒まで果たして何故奴に勝てない、原因は一体何なんだ」

天才的なおつむで今日の失敗を振り返る。考える事2秒弱

「よしっ！ そうしよう」

さすがだっ！ さすがは僕、考えても分らないと直ぐさま気付き、明日の作戦を立てる事にした。そしていい案を幾つか思い浮かべ、声高らかに笑い母親に怒られ就寝した。

5日目 吸引力の変わらないただ一つの掃除機……。 (前編)

5日目

―7月5日 8時00分―

お小遣いUPまで後3日。現在の所持金0円。

今日も僕の朝は変わらない。入れたてのコーヒーと少しレンジでチンした丸ごとソーセージを食べる。うん、今日もいい朝だ！

「して、拓己よ！ その後五百円はどうだ？ 変わりないか？」

うん。レオナルド・ダ・ヴィンチもビツクリの最後の晩餐になりそうだ！ 僕は苦し紛れに嘘を吐く。

「うん。その後も――」

「嘘を吐くな！」

うん。確かに吐こうとしたけど……、けど、まだ嘘すら吐いていないよお母さん。気を取り直してと。

「未だに五百円はご健在だよお母さん！」

その言葉に何か引っかけたのか僕を見つめるお母さん。ハレルヤ！ あっ、違う間違えた。バレルナ！

「……」

少しの沈黙が流れる。まずい……、本当にハレ晴レユオイ！ あっ、間違えた。本当にばれないでくれ！ ちょっと無理あるかw

「……」

するとお母さんは何も言わないまま財布を出した。えっ、何すんの？ 嘘バレた？ つか財布でどうやって僕を殺す気なの？

―チャリン―

僕の行動予想とは違いテーブルの上に3枚の硬貨が転がった。えっ？

「どっ、どうしたの母さん？ 気でも狂ったの？」

僕は本気で心配した。だが直ぐに僕は勘違いに気づいた。はっ、ちつ違っ、これはまさか……、あの暗殺用の技……、

『羅漢銭らかんせんかつ！』

「違っは！ あんたは私を銭形 平次だとも言うのかい！」

いや僕はてつきり魔法先生ねぎ○の龍宮○名の方を想像したんだけど……、

「確かに母さんは赤○先生の作品じゃないね。うん。銭形 平次だよ！」

——ドスっ——

そして気付いた時には僕のお腹にお母さ——銭形 平次の拳が深く叩き込まれていた。これこれ、いつもそうだ。気付くと倒れていて何があったのか分らない。本当に困ったもんだよ！

「すいません、もう銭形 平次は墓まで持っていくよ！だから許してください」

うう、さすがにお腹にいいのもらっちゃったから、まだ呼吸が苦しいよ。それでも昔はいいのもらった後は絶対に吐いていたから、こう見えて僕も成長しているんだね！ それより羅漢銭らかんせんじゃなきゃそのお金何に使うんだろう？

「お母さん？ それじゃあ一体何なのそのお金は？」

「これかい？ あんたもさすがに一週間もお小遣い無しじゃ可哀想だから、ほらっ、これでジュースでも買いなさい！」

テーブルに転がった120円を拾い僕にくれる母。何だかんだ言ってもやつぱりお母さんだ！

「心して使っんだよ……。それが最後のお小遣いになるかもしれないんだ」

どっちなんだよ！ 飴と鞭をほぼ同時にもらっちゃったら意味無いよ！ 何てお母さんだ全く。でもくれるって言つなら遠慮なく頂こう！

「ありがとう。じゃあそろそろ学校に行ってくるよ！」
そして僕は家を後にした。

―7月5日 15時00分―

帰宅後、僕はジャージに着替え自販機の前に立った。それにしても今日も暑いなあ。

「あつそうだ！ 自販機よ！ しばしの休戦しよう」

僕は母親から貰った120円の存在を思い出した。財布から全財産を取り出し自販機に入れる、今日の狙いはもちろんおつきい方のコーリヤだ！ ここ数日は憎き敵であった自販機がこの時だけは天使のように思えた。

―ガシャン―

「……。僕たちはどうしてこうなってしまったんだろうね」

僕は自販機からコーリヤを取り出した。その時ふと自販機と初めて合った時の事を思い出してしまった。

「君は覚えているかい？ 僕が背骨を痛めながら120円を握りしめて家から出て来た日の事を。母親に実験材料としてアルゼンチンバックブリーカーをかけられていた事を。本当は脱糞してしまっていた事を」

当時の僕は母親にプロレス技の練習材料として使われていたんだ。今思い出してもケガをしていなかった日は無かった。そして漏らしていない日も……。

「毎日のように続いた実験と脱糞の繰り返し、生きている気がしなかったよ。でも、そんなある日、僕の苦痛を和らげてくれる存在に

出会ったんだ。そう、それが君の売ってくれたコーリヤだった」

僕の壊れかけていた心と、かぶれかけていたお尻を救ってくれたのは君だった。僕は口には出さないものの自販機を見つめる目は感謝でいっぱいだった。

「あの日から僕の人生は変わったよ。コーリヤを買うために自ら進んで技をかけられにいった日もあったっけな。本当に毎日が幸せな日々だったよ。でもそんな幸せも長くは続かなかった。そうあれは母親がキン肉バス。ーをかけた時だった。ああ、人間技を離れてしまつてはもう終りだと思つたよ。結果、全身を複雑骨折。暫くの入院が決まつたっけ」

自販機は何も語らずただずっとボタンを交互に光らせていた。コーリヤとスプリヤイトの周りをクルクルと。

「退院の日、僕にとつてすごい幸せな事があつた。そう君が僕の退院を祝つて+150ml増量缶を仕入れていてくれたことだった……」

この時、僕の込みあげた感情は爆発した、その勢いもあつて膨張した肛門も爆発した。結果。脱糞をしてしまった。

「どうして！ どうして君はそんな奴になつてしまつたんだよっ！」

→（脱糞中）

「僕らはうまくやっていけてたじゃないかっ！」

→（8割方トランク스에 収集完了）

「君は僕にコーリヤを売りっ！」

→（2割方トランク스의許容範囲を超え足元に落下）

「僕はコーリヤを買うために毎日キン肉バ。ターをくらう」

→（最後の一糞を靴でワントラップ）

「そんな幸せの循環が出来ていたじゃないか。全て上手くいっていいじゃないか……」

→（ワントラップ後、少し浮かせソレを蹴り飛ばす。うまく空き缶入れにゴールっ！）

「……。もうあの頃には戻れないんだよね？」

→（少し冷静になり段々とお尻が痒くなってきたことに気付く）
「君はまた何も言ってくれないんだね。わかったよ、もう何も言わない。これからは本当の殺し合いだ。準備してくるから君も覚悟しておくといいよ」

→（我慢の限界！ トイレへ急行！）

― 7月5日 15時30分 ―

「たぶんこれで、この兵器で君との因果は終わるだろう……」

おNEWのパンツに履き替え新兵器を手に舞い戻った。もちろんお尻にはフェミニーナ軟膏を塗ってある。

「さよなら、僕の足長おじさん！ イデよ！ ダイソン！」

そして僕は両手に持った掃除機を天高く掲げ遠くを見つめた。その目には涙の跡が少し残っていた。

― 第1 ラウンド 自販機VSダイソン（ただ一つ吸引力の変わらない掃除機） 15時45分 ―

「さあ、ダイソンよ速やかに敵将を討ち取るべし！ 行くぞ！ スイッチON！」

僕は右手に持った吸引口を自販機の下へと向ける。そしてスイッチを入れた。

― カチッ！ ―

「……」

んっ？

「スイッチON！」

― カチッ！ ―

「……」

あれっ？

「ON！ ON！」

― カチッ！ カチッ！―

― しーん……―

「嘘だっつ！」

昨日試した時は確かに動いていたんだ。何で？ 僕はダイソンをくまなく見回した。

「しまったぁ！」

僕はダイソンから出ているコードの先に目を向けた。何だコンセントが刺さっていなかったのか。僕ってお茶目さんだな。僕はその場でコードを伸ばしコンセントを持って家に向かった。

― からから―

んっ？ 家に向かう途中に妙な足音が聞こえた。しばらく無視していたがその足音はずっと僕に着いて来ていた。

― からから―

「誰だっ？」

僕は恐かったせいもあり肩こしに後ろを見たがそこには誰もいなかった。昨日ひぐらしの。く頃に見たからちよつと疑心暗鬼になっていたのかも。

「ふう。なんだ気のせいか……」

気を取り直して再び家に向かった。

――からから――

んっ？ やっぱり誰か付いてきている……。まさか本当にオヤ。口様の祟だとも言うのか……。

「嘘だっ！ そんなまさか……。ここは雛見。じゃないんだし、そんなまさかね……」

僕は疑心暗鬼を振り払うように家に入ってしまった。

――からから、がつっ――

その足音はとうとう家の中にまで着いて来てしまった。しかもそれは僕の持っているコードを引っ張って僕の進行を止めてきた。

「なっ、待ってよ……。どうして、だって僕は雛見。出身じゃないし祟なんてあるわけ無いじゃんよ……」

僕は恐る恐る後ろを振り返った。しかしそこには誰もいなかった。僕は恐怖を押し殺してコードの先を辿っていった。

――ダーン――

僕はコードを廊下に叩きつけた。

「ダイソン着いて来ちゃったよっ！ って明らかにコード長さ足りないじゃんかよっ！」

祟の正体はダイソンだった。そしてそれは作戦の失敗を告げたのであった。

――第1ラウンド 自販機WIN（オヤ。口様の祟） 16時00分――

「いやっ、待てよ……。あれさえ、あれさえあれば……」

その時、僕の中に圧倒的閃きが浮かんた。コレならイケるよ僕。

何だ簡単じゃないか。そして僕はダイソンを廊下に置き、とある物を取りに行った。

―第1ラウンド延長線 自販機VSダイソン（ただ一つ吸引力の変わらない掃除機） 16時05分―

「よしっ！ これで準備OKだぜ」

僕は家に置いてある延長コードを手にしダイソンに装着する。

「パイルダーオーンっ！」

そして接続を終えると一目散に自販機へ向かう。これならいける。やったあ、もう僕を止めるものは何も無い。

「これで全ての惨劇は回避された、後はあの五百円を救出するだけだ」

勇む足を押えきれずに駆け出す僕、そして玄関の扉の前に立ち止まり扉を開く為両手で持ったダイソンを片手に持ち帰る。

―がちゃっ！―

「おや？ バカ息子そんなところで掃除機を持って何をしているんだい？」

急なラスボスの参入により惨劇は加速度を上げた。母さん……。何故こんなに早く……。

「そつ、掃除でもしようかなあつて。エヘッ！」

僕はとつさに惨劇を回避した。さすが僕の脳みそ、こんなとつさの出来事に素早く対応するなんて。やはり天才。

「そうかい、それはいい心がけだね。それじゃまずはキッチンでも掃除してもらおうかね」

えっ……。おわた……。まただ、僕の天才的な頭脳はまたしても母親の絶対的な力に屈する。今断ったらどうなるか……。

「任せてよ。お母さん……」

―― 第1ラウンド延長線 自販機WIN（オヤ。口様出現により）
16時00分――

そして僕は掃除機をかけた。ただひたすらに

5日目 吸引力の変わらないただ一つの掃除機……。 (後編)

―7月5日 17時00分―

「ふう、掃除終わったよ母さん」

取り敢えず言われた箇所の掃除を終え母さんに報告した。それにしてもコキ使うんだから参っちゃうよ。

「そうかいそうかい、そりゃご苦労だったね」

何て事だそれなりにちゃんと掃除をしたのに労いの言葉がそれか……。ここは講義してやる。

「このつ――」

いやっ、待てよ。ここは講義する場面では無い……。そうだここは冷静になって母親を追い出す場面だ、じゃなきゃせつかくのダイソンが、ああダイソンが。

「そういえば母さん、今日は帰ってくるのがやけに早かったね」

そうだクールになれ拓己、僕の天才的な頭脳で母さんを外に誘導するんだ。

「そうさね、店長が今日は早く上がらせてくれたんだよ」

何て余計な事を、是非店長にキン肉バ。ターをかけて上げたいよ。

「でもその変わりに7日の土曜日がいつもより帰りの時間が遅くなっってしまったけどね」

チャーンす！ ごめんね店長、グッジョブだよ。後は母さんを外出させるのみ。

「そうなんだ、それはそれで大変だね。そういえば母さんたまにはジョギングでもして来たらどう？」

これは上手い作戦だ、我ながら天晴れだよ」

「んっ？ 急にどうしたんだい？」

そうやって聞き返してくるのは計算済みだよ。僕の手の平で転が

されるといいよ母さん。

「いやっ。最近少し太って来たんじゃないの母さ——」

——バキッ——

ああ、またか。気づけばまた天井を見ているよ。手のひらで転がされたのは文字通り僕の方だったんだね母さん。それにしても立っていた僕をどうしたら一瞬で床に叩きつけられるんだろう。

「うう……、痛いよ母さん……」

「当たり前さね。レディに体重の話をするもんじゃないよ」

うう……。レディにツツコンだらまた床に顔を叩きつけられるんだろうな、やってられないよ。

「さっきのはジョーダンだよ母さん。本当は技のキレが落ちたんじやないの？って言いたかったんだ」

これはナイスな緊急回避だよ。やっぱり発想や閃きが世界を救うね。

「ほうっ！」

——どーん、バキッ——

「どうだ？ 技のキレは落ちたか？」

「……」

返事はないただの屍のようだ……。すごいよ母さん、今僕は気絶する寸前を確認しているよ。

「返事も出来ないようだね。これじゃあ本気を出す必要はなさそうだね」

ああまだ本気じゃなかったのか。お分かり頂けたでしょうか？
もう人を名乗っているのが反則だよ……。

——ガクッ——

そして僕は気絶した。

―7月5日　23時30分―

「ツツパピヨッタ！」

はあ、はあ、何だ夢か……。まさかあんなところでツツパピヨルとは……。ってここはどこだ！？……そうだ僕は気絶してしまっただ。今何時？　台所に掛かっていた時計の針は23時30分を示していた。

「あのババア！　僕を台所に放置していきやがった」

コレが噂に聞く放置プレイって奴なのか、全然楽しくないじゃないか。そんな事よりももうこんな時間だ早く自分の部屋に戻って寝なくちゃ。そして僕は二階に戻った。

「はあ、今日は結局自販機との対決は出来なかったな……。明日こそはダイソンでトドメを刺さないと」

僕は床に就く前に少し気になり自販機を確認した……。そしてその目を疑った。

「誰だ……。あいつは……」

そこには自販機の前を何度も往復している少し小汚いおじさんがいた。僕の直感はずぐに働いた。あの人やるわよっ！　万引きGメン顔負けの直感だった。

「やるわよ、やるわよ……。ほらやったっ！」

そしてそのおじさんは自販機の下に手を入れた。間違いないあの人は僕の命とも言える五百円を狙っている。だがこの時の僕はさほど慌ててもいなかった。なぜならその五百円に辿り着くにはこの僕ですら苦戦を強いられた自販機が守っているからだ。

「おじさん残念だったね。君の頭脳じゃその防御壁は突破出来ないだろう」

そう、ここ数日の間五百円的位置が多少動いていたのはきつとあ

のおじさんの仕業だろう。おじさんもずっと苦戦していたんだね、それもそうだろう。おじさんの知能がどれ程かは分からないけどこの僕ですら無理なのだから。僕は安堵を浮かべおじさんの様子を伺った。するとおじさんが何かをボヤキ出した。

「だめかあ。ちつ、仕方ないダイソンでも持ってくるか」

僕は慌てて部屋を飛び出した。ダイソンはマズイ。くそつ、ああ見えてあのおじさん僕並みの知能を持っていやがった。だが部屋を出ようとした時、僕の中の危険察知能力がフルで警告を鳴らした。

「しまった。今ここを出ていったら母親にバレる可能性が……。ちつ、だが敵はあのダイソンだぞっ！」

僕は部屋の扉の前で立ち往生してしまった。母親にバレる可能性とダイソンの危険性どちらも天秤にはかけられない程の代物だ。焦る気持ちに僕の思考を鈍らす。

「くつそ！　こんな時にあの五百円があれば、羅漢銭であいつを仕留められるのに」

言っていることがもうちぐはぐだった。くつそ万策尽きたか……。せめてここから何か出来れば……。はっ！　そうだあれがあったんだ。あれならあのおじさんを……。僕は急いであれを取り窓の前に立った。

「おじさん私怨は無いが僕の命が懸かってるんだ。ごめんなさい」
そして僕は右手に持ったエアガン、50口径デザートイーグルを掲げた。

―第1ラウンド　おじさんVS50口径デザートイーグル（対象年齢18歳以上……ヤベっ！）　AM24:00―

僕は　右目で　スコープでおじさんを補足。狙いはテンブルだっ！　おじさんは五百円に夢中で僕に気付いていない。そしてロツクオン……。

「ふつ、トーシロが人の獲物に手を出すからだ、死にさせえ」

「！」

―パシュン―

―カンッ！―

50口径から弾き出された玉は虚しく自販機の鉄に跳ね返された。
「きつ、消えただと……。まさかっ！」

僕は目を疑った、引き金を引く一瞬の間にそこに確かにいたはずのおじさんが消えていたのだから。そして僕は消えたおじさんを探した。だが気付いた時には既に遅かった、僕に逃げ場は無かったのだ。

―パシュン！―

そしてその音と共に僕の頬を弾丸がカスっていった。僕が弾丸の発射方向を見るとおじさんが電柱に隠れながら僕の様子を伺っていた。その手にはスナイパーライフル、L96 AWSが握られていた。

「くっそっ！　僕はスナイパー相手に狙撃戦を挑んでいたのか……。何て愚かな」

そして次弾が発射される前に僕は窓際に逃げた。一瞬で僕の視界から消えて次の瞬間に僕を狙撃、あのおじさんは只者じゃない……。きつとさっきの弾丸も僕に簡単に当てられただろう、なのにカスラせた……。忠告ということか。

「ちっ、白兵戦ならまだこちらに勝算はあったが、狙撃戦なら分が悪い」

僕はそつと窓から顔を出しおじさんを確認しようとした。

―パシュン―

駄目だ確実に狙われている……。だが甘い、奴の持っているのは装填に多少のタイムロスがある、その隙をつけば。僕は次弾装填前に顔を出した。

―パシユン！―

そしてまた僕の頬を玉がカスめていった。

「まさか！　いくらボルトアクション式といえどあのスピードは……。奴はニュータイプだとも言うのか……」

駄目だ、全く勝機が見つからない。どうすれば……。奴に勝つにはもうロケットランチャーかグレネードで爆破するしか無い。でも僕はそんなモノ……。あつ！　そうだ。

―第1ラウンド　おじさん（L96　AWS）
WIN　24時30分―

おじさんがニュータイプだったため

「先程は苦戦を強いられたが今新型が届いた。これで奴に勝てるぜ」
僕は窓から少し顔を出しおじさんを確認した。

―パシユン！―

「ちつ、まだ狙ってやがる。何て忌々しい奴だ。だが僕には一歩及ばない」

そして僕はおじさんの位置の確認を終え、手にロケット弾を持った。これで準備は整った、後は撃つべし！

―第2ラウンド　おじさん（L96　AWS）VSロケット弾　24時45分―

「さらばだもう一人の友よ……」

— シュボ —

— ジジジジ —

「よしっ、今だ」

僕は窓から手を出しそのロケット弾を解き放った。だがさすがのおじさんだロケット弾の発砲と共に僕の手には強烈な痛みが走った。
「さすがだ、あの一瞬で僕の手には銃弾を命中させるとは、だがコレで終わりだ」

— ヒュー —

— パーン —

— がらっ —

「アベシー！」

僕のロケット弾もといロケット花火は見事におじさんの狙撃に成功した。そして「アベシー」と叫びながら尻尾を丸めて逃げていつてしまった。

「はっはっはっ！ はあーっはっはっ！ あのおじさんもこれに懲りてもう姿を現す事は無いだろう」

僕は高らかに笑った。そして勝利の余韻に浸っていた。

「しかし傑作だ、笑いが止まらんよ。勝利とはこうもいいものなのか。ってあれっ？ 今たしかガラっ！ て言わなかったっけ？」

僕が気づいた時にはもう遅かったです。僕が後ろを振り向く一瞬の差で母親の手刀が『トーン』って僕の延髄を揺らしたんです。
「なっ何故に……」

僕は薄れゆく意識の中、母さんに問いかけた。

「坊やだからさ……」

そして母さんのその言葉と共に僕は気を失った。

第2ラウンド　母さ——シャ。・アズナブル（手刀でトーン）W

IN（ロケット花火がうるさかったため）　24時45分—

そして僕は深い眠りに就かされた。

6日目 定められし運命、その名は佐伯！（前編）

6日目

―7月6日 08時00分―

「ダメだペスっ！ 転職するなら武道家じゃなきゃ」

はっ！ 夢か……。危うくペスが遊び人に転職するところだったよ。母さんの手刀で『トーン』から無事に目を覚ました僕は急いで窓から自販機を確認した。

「ココからじゃ五百円の所在は……。早く見に行かなくちゃ。でも……」

僕は逸る心を落ち着かせた。ここで下手を打って母さんにバレてしまつては元も子もないからだ。そして僕は心を落ち着かせ学校の支度を始めた。

「念のためコレも持っていこう」

―7月6日 08時30分―

お小遣いUPまで後2日。現在の所持金0円。

朝食を食べ終えた僕は急ぎ足で自販機の前に向かった。お願いだよ、五百円様その無事なお姿をどうかこの眼に。緊張しながら祈りを込めて僕は下を覗いた。

「あつた！ あつ！ あつ！ あつ！ あたあよおーっ！」

僕は五百円の無事を確認した。どうやらあのおじさんはあの後来なかったみたいだ。僕は安堵の表情を浮かべた、そして一度家の前に戻った。僕が学校に行っている間にあのおじさんが来たら大変だ

からね。もしもの為に保険を掛けておかなきゃ。

「という事で後の首尾は任せたよペスっ！ おじさんが来たら確実に殲滅だからね」

その僕の言葉にペスはこういった（注 ように聞こえた）

「任せときな旦那っ！ 爪を研いで待ってるぜ」

何て頼もしいんだろう。僕はペスに後を任せ学校へと向かった。

―7月6日 14時30分―

「はっ、はっ、ふうっ」

帰りのHRが終った。僕は無我夢中で走った。そうこの角を曲がればあの自販機、五百円が待っているからだ。ペスが守っているからとはいえ授業中も心配でならなかった。あのおじさんがもしダイソンを持って来たら……。不安だけが募った。五百円の変わらない姿、それだけが僕の願だった。

『バウっ！ バウっ！』

ペスの吠える声が聞えた。僕の脳裏に嫌な予感が走った。僕は急いでカバンから念のため持って来ておいたデザートイーグルを出した。そして角を曲がった。

「えっ！」

僕が銃を構えた先、つまり自販機の前にはダイソンがポツンと置いてあった。そして次にペスの視線の先を確認した。そこには一冊の本が置いてあった。僕はその本へ向かった。

―外人・幼女・素人投稿写真―

「このっ！ バカ犬が」

「クウくん」

僕はペスに雑誌を投げつけた。ペスはそれを加え犬小屋に帰っていった。何てことだ、僕の命よりペスは金髪幼女を選んだのか。涙

を流す前に僕にはやる事があつた。そう五百円の確認だ。

「お願いします、あってください……」

僕は自販機の前に跪きそつと下を覗こうとした。だが、その時後ろから聞きなれない声がした。

「君っ！ その獲物は私のだ手を出さないでほしい」

あつた。確かにまだ五百円はその輝きを保つたまま自販機の下に健在だった。そして僕は後ろを振り返つた

「「おっ！ お前は」」

振り向いた僕の前に立っていたのは昨日のおじさん、そう昨日激戦を繰り広げたあのおじさんが立っていたのだ。僕は直ぐに臨戦態勢に入つた、右手にデザートイーグルを持ちおじさんのテンブルを狙う。そしておじさんも同じように手に持った延長コードを構えた。なるほど……、おじさんもコンセントの問題に引つかかっていたんだ。全く持つて恐ろしい、正に僕並みの頭脳の持ち主だ。

「君っ！ おとなしくその銃を下ろすんだ、そしてその獲物は諦めなさい」

多分、今現在優勢なのは僕の方だと思う……、でも何だろうあのおじさんの自信に溢れた表情は。

「おじさんこそ、その延長コードでどうやって僕と戦う気だい？」

その疑問におじさんは口の端を上げ不適に微笑んだ。何だ？ 一体何があるというんだ？ 僕は身構えた。

「私はおじさんではない、佐伯だっ！」

台無しだっ！ たしかに無理はあつたのかもしれないけど。せつかくのシリアスモードが一瞬で台無しになってしまった。ある意味天晴れだ。

「じゃあ、佐伯さんそれで僕とどう戦う気なの？」

さっきの佐伯さんの一言に僕は少し気が抜けてしまった。だが佐伯さんは逆に眉間にシワを寄せ真剣な眼差しを見せた。しまった、計られた。まさか僕を油断させる作戦だったなんて、下手したら僕を上回る頭脳の持ち主だ。

「人に名前を聞いたらあつ！ 自分も名乗るのが礼儀だろうがっ！」
怒られた。うん確かにそれは正論だし礼儀だと思うけど……。

「僕は拓己って言います。すいません何か名乗るの遅くなってしま
つて」

謝ってしまった。佐伯さんの迫力のある湯に完全に流されてしま
っていた。この後どうしよう……。

「いや、分つてくれればいいんだよ。おじさんは何も君が憎くて怒
っているんじゃないんだからさっ！」

やばい何か説教が始まっちゃったよ。何キャラ目指してるの？

ダメだこのままじゃ最後まで佐伯さんのペースになっちゃうよ。こ
こはひとまず話を戻さなくっちゃ。

「それより……。このダイソンは一体何なんですか？」

よしっ！ これで思い出してくれ。僕らが今争っている事を、じ
やないと話が先に進まないから。構えたこの銃が恥ずかしから。

「ああコレか？ これはダイソンっ！ 吸引力の変わらないただ一
つの掃除機だよ」

ああ違っんだ、吸引力が変わらないただ一つの掃除機なのは分つ
てるんだよ。言いたい事はそれじゃなくて。仕方ないちょっと責め
方を変えてみよう。

「佐伯さんたしか昨日の夜僕と戦ってましたよね？」

よしっ！ これはほぼ直球だよ。っていうか戦うって単語出した
しね、コレなら通じるはず。さあ思い出して佐伯さん。

「そうだった！ 昨日といえば……」

そうそうその調子その調子。

「あれっ、そうだよ拓己君。ロケット花火は反則だよ、私もいい年
なのに『アベシーっ！』とか言っちゃったじゃないか」

どうしてだろう、どうして佐伯さんは少し照れたように鼻の下を
擦っているんだろう……。でも確かにロケット花火はやり過ぎだっ
たかもしれない。うんっ、ここは素直に謝っておこう。

「確かにそうですね佐伯さん。ごめ——」

「だがそれがいいっ！」

分らない。答えが見つからないよ。って違う違う、危うく僕ともあろう者が翻弄される処だったよ。僕達は五百円を巡った敵同士なんだ。

「おじさんがどうしてこの五百円を狙ってるのか、理由に興味は無いけど。この五百円は僕にとつてとても大事な物なんだ、だからおじさんには渡せないよ」

少し無理矢理気味だけどこれで軌道修正完了だね。これで僕の構えた銃にもハクが付くつもんだよ、さあ反論するんだっ！

「おじさんじゃないっ。佐伯だっ！」

何コレっ？ 何なの？ このループからは抜け出せないの？ パ
○ラッシュ僕もう疲れたよ……。

「すいません。それで佐伯さん。僕この五百円が必要だから諦めて頂けると嬉しいんですけど」

もうあれこれ考えるのはよそう。素直が一番だよ。

「そうか……」

意外にも僕の言葉に佐伯さんは深く考えてくれた。何だ最初から素直に言っていおけば良かったよ。本当は話の分る人なんだね。

「……そうだっ！ 京都に行こう」

もうJRでも何でもいいから勝手に行つて来てくれ。話が噛み合わないよ。どないせいつちゅうんじゃい。

「はっはっはっ！ 今のは冗談だよ。だけど拓己君この五百円は私にとつても大事な物なのだ、だから諦める事は出来ない」

このクソジジイめ、話に通じてたくせにワザとからかっていやがつたな。さすがの僕も頭にきたぞ。

「諦められないって、その五百円は元々僕の落としたものなんだ。否が応でも諦めてもらうよ」

少し強めの口調でいい放った。この時既に頭の中にはこの後の展開を予んで次に言う言葉を決めていた。さあ僕を怒らせた報いを受けるといいよ佐伯さん。

「困った子だな、その五百円が拓己君のだって言う証拠でもあるのかい？」

やはりそう来たか……。だが甘い。そう証拠ならある、僕の母親の付けた指紋がね。

「ふっふっふ、佐伯さん僕を見くびらないでほしい。証拠ならあるんだ」

「ほう、聞かせてもらおうか……」

どうやら僕の自信に満ち溢れた顔に怖気づいたかな。よしっ！
このまま仕留めてやる。

『何を隠そうあの五百円には僕の母親の指紋が付いているんだよっ！』

決まった。これでおじさんとの因縁に終止符がついたよ。ほぼ僕の予想通りに運んだもんね、完璧だよ。

「そうか……」

ふっ、どうだっ！ その後のセリフすら僕の予想通りだよ。

「……。えっ！ その通りだよ、あれには指紋が付いているんだよ。よく知っているね拓己君」

なにっ！ 何故だ……。何故あの五百円に指紋が刻んである事が分かったんだ……。はっ、そうか今僕が言ったんじゃないか。佐伯さんはそれに合わせたただだ、くっそお、しまった、僕のバカっ！
何たる愚考……。

「くっ、佐伯さんどうしても引いてはくれないのかな？」

「拓己君には申し訳ないがこればかりは……。おじさんも生活が掛かっているからね」

五百円の生活って……。だめだ同情しちゃダメだっ！ 僕の場合は直で命に係わるんだ。

「ならやつぱり決着を付けるしか無いようだね」

僕は構えた銃の引き金に手を掛けた。ごめんね佐伯さん。本当は僕も辛いけどっ！

「まあ待ちたまえ拓己君、そこで提案があるんだが？」

んっ！　ココに来ての提案……。一体なんだろう？　僕はいったん引き金から指を離した。

「それでその提案と言うのは……？」

「まず私達の目的は五百円を取る事。決して相手を痛めつける事では無いと思うんだがどうだい？」

確かに。僕は五百円が無事に手元に戻ってくるなら佐伯さんと争う意味は無い。僕は一先ず佐伯さんに向けた銃口を下げた。

「そこでだっ！　お互い一回ずつその五百円を取る権利を付けようじゃないか。もちろん取れなければずっとループする形になるが」

なるほど、お互いに一回ずつチャレンジするという訳か。確かにこのまま均衡していたって拉致はあかないし、何より僕にはタイムリミットがある。よしっ！

「分ったよ佐伯さん。その話呑みましよう」

僕は銃を下ろし変わりに反対の手を差し伸べた。僕と佐伯さんは一先ずの休戦体制に入った。

6日目 定められし運命、その名は佐伯！（中編）

―7月6日 15時30分―

何て事だ……。何処をどうすればじゃんけんは30分も時間を費やせるんだ……。その後、僕と佐伯さんはどちらが先にチャレンジするかをじゃんけんを決める事にした。もちろんお互いの狙いは先行、このサドンデスルールでは先行が五百円を取り出せばその時点で先行の勝利となる。ならばお互い狙うは先行、そして始まったじゃんけん、それから30分……。

「あいこでしょっ！」

いくら同じような思考をしていたとしても30分、数にすれば数千回というじゃんけんの全てがあいこ。僕達はその日決して塗り替えられないギネス記録をたたき出した。

「佐伯さん、はあ、はあ。さすがにそろそろ諦めて僕に先行を譲ってくださいませんか？」

「はっはっ、拓己君それは出来無い。それに先行を譲るなら君が私に譲るのが常識、年功序列という言葉を知っているかい？」

さすがに言葉の駆け引きでは引き下らないか……。かと言ってこのままじゃんけんを続けるのは愚行。そう僕には時が限られているからだ。ここは少し危険な賭けではあるが先行を譲ってみるか……。

「そうですね、わかりました。年功序列なんて言葉を出されては僕が引くしか無いようですね。仕方ないですけどここは先行を譲りましょう」

悔やまれる……。時間制限という足枷がある事に……。

「ほう。それはいい心がけだ、だが拓己君何を企んでいる……」

疑うような視線で僕を睨む佐伯さん。確かに僕が佐伯さんでも疑うだろう。だけど今回は作戦では無い、まあしいて言えば時間制限

がある事は知られないようにしなければいけない、そのくらいか。

「佐伯さん。僕は――」

「だがそれがいい!」

どうやら結局納得したみたいだ。それにしても先行を譲ったんだ、佐伯さんがどう出るか気になってしょうがないよ。

「じゃあ佐伯さん、お先にどうぞ……」

「それじゃあ遠慮なくいかせてもらうよ」

僕のその言葉に佐伯さんはニヤけて見せた。まずい……、あの自信たっぷりの笑みの理由は何なんだ……。何か見落としている事があるはずだ。

「それじゃ、失礼するよ」

佐伯さんはそう言い残し僕の家に歩いていった。何か見落として……、僕の家……。

『しまったっ! ダイソンかつ!』

僕は急いで佐伯さんを追った。家の庭、というより玄関の直ぐ脇にはあれがあるんだ。そう外部電源が……。しかし僕がそこに着いた頃には既に遅かった。

「佐伯さんおのれ、僕を謀ったなっ!」

「いやあ拓己君、読みが甘かったようだね。まさかダイソンの存在を忘れて先行を譲るとは、愚考も愚考、それで私に挑むなんて十年早かったようだね」

満遍の笑みを浮かべ延長コードを差し僕の横を抜けていく佐伯さん。マズイ……、本当に何とかしなくてはこの戦負けるぞ、何か他に手はないのか僕よ。必死に試行錯誤しこのピンチを回避する妙案を思い浮かべる。一方その頃佐伯さんは手に持った延長コードと掃除機を超電磁合体させていた。

「それじゃ拓己君、お先にいかせてもらうよ」

そして佐伯さんは手に持ったダイソンを自販機の前に運んだ。まっ、まずい……、どうする? いっそ五百円を取らせて電気代としてその五百円を頂くか? ダメだ佐伯さんの事だから使った電氣量

を見事に計算してキツチり小銭で払ってくるだろう……。ならどうする……。？ 事故を装って電源コードを抜くか……。いや待て僕っ！ 思い出すんだ、あれはいつだったか僕が大好きなド。クエをやっていた時の事を、そうその日は何故か途中途中セーブするのが面倒でずっとプレイしてたっけ、そしてやっと仲間にしたはぐ。メタル。その瞬間僕は天にも登る思いだったじゃないか。そしてその後一秒もしないうちにスーファミのコンセントに足を躓かせた母親。真っ暗な画面……。もちろん泣いたよ、ああ泣いたさ。やつとの思いで仲間にしたはぐ。メタル、その間に随分とレベルも上がったっけ、それをあの一瞬であの母親は全てを奪った。もちろん抵抗した僕初めての暴力、懇親の右ストレートはまんまと母親の耳を掠り、そしてクロスに放たれたカウンターが見事に僕の顎を打ち抜き脳を揺らした……。もうあんな思い誰にもさせちゃイケないんだっ！ でもじゃあどうすれば……。

『さっ、佐伯さん！』

思わず叫んでみたはいいが何も思い浮かんでいない。いつその事全て話してしまうか、たしかに取る前なら信用してもらえるかもしれない。だがしかしそれを話して逆効果も……。

「どうしたんだい拓己君？ この期に及んで悪あがきとはらしくないじゃないか。とは言っても勝負は勝負、ここは遠慮なくいかせてもらおう。すまな——、おっとこれは勝負事お互いそれは言いっこなしだね」

——かちっ——

——キューーン——

そして佐伯さんはスイッチを入れ自販機の下にダイソンの吸引口を進めた。万策尽きたか……。後は佐伯さんの失敗を願うのみ、読んで字のごとく神頼みと言う訳か……。頼むっ！ 取れるなあ！

—キュー——ン—

ゆっくりと進路を進めるダイソン。その距離後1m……500？……200？……。吸引口が自販機の下に近づく度に僕の心拍数は比例して大きくなっていく。頼む神様、ここ一番僕に天運を……。そしてその距離0？、後は自販機の下に入っただけだった。

「拓己君っ！ 残念だったようだね、この五百円は私が頂くっ」

—ガッツ！—

「何っ！」

二人は声を揃えた。それもその筈、電源も確保し後は狙いに向けて進んでいくだけだったダイソン。そのダイソンの吸引口がまさかの規格外っ！ つまり先が大きすぎ自販機の下に入っただけだったのだ。盲点。正に盲点。だいの大人とおバカ——天才中学生のこの僕、二人もいて気付かなかった事実。僕は笑った、高らかに笑ってみせた。

「はっはっはっ！ はあーはっはっはっ。不様……、正に不様とはこの事を言っただね、ねえ！ 佐伯さん？」

確かに僕も気付かなかった。気付かなかったけど実際に行動はしていなかった。この差が僕と佐伯さんには大きく響いた、必然的に僕の立場は佐伯さんよりも上にたった。その証拠に佐伯さんは僕の言葉に対し返答出来なかった。

「どうしました、佐伯さん？ ぐうの音も出ないんですか？ それはそうでしょうね」

もちろん佐伯さんからしてみれば僕も同類、同じ穴のムジナであろう。だがそれを口には出来ない。思っただけで口にしてしまえばただの負け犬の遠吠え。よってここで佐伯さんはそれを口に

は出来ない。これが気付かなかったけど行動した者としていない者の差。

そして僕はこの隙、千載一遇の好機を決して見逃さない。先程から頭の中に置いてはあったが条件が揃っていなかったために使用できなかった秘策。それを今ここで使用する。

「そこで佐伯さん。少し僕の話に耳を貸してはもらえないだろうか……？」

とても穏やかな表情で佐伯さんに語りかける僕。

「なんだい拓己君？ この期に及んで話しとは」

疑いはあるけれどもこの状況、必然的に立場が上となった僕の話に耳を傾けざる終えない佐伯さん。正に理想のシチュエーション。そして僕はあの事、つまりこの状況を利用し僕がああ五百円を必要理由を告げる、ある条件を付けて。

「今なら話せる。僕がこの五百円を必要とする理由が……。聞いてくれるかな佐伯さん？」

「……ああ、そうだね拓己君の理由とやらも聞いておこうかな、せっかくだし」

もちろん佐伯さんの返答は予想通り。そして僕はこう続けた。

「担当直入に言つと、僕はある人からの命令で7月8日迄にあの五百円を手元に持つていないと殺されるんです……。もちろんこの時代に殺しなんて？ そう思うだろうけどこれは本当の事なんです。じゃあなんであの五百円に拘るんだ？ そう思うでしょうけどそれにも理由があります。先にも話したと思うんですけどあの五百円には真正銘人の指紋が刻んであります。ちなみに僕の母親のです。そして僕にその命令を告げたのも母親です。つまり母親が偽装を防止したあの指紋付き五百円を持つていないと駄目なんです。これで分かって頂けたでしょうか？ 僕の戦う理由が」

よしっ！ 今のところ順調だ。後は佐伯さんの出方次第だ。

「ひとつ質問をいいかな、拓己君が命を賭けてまでその命令を受けた理由は何なんだい？」

さすがに鋭い……。上手く誤魔化したつもりがさすがに冷静だ、まさかお小遣いが欲しいためについノリで言っちゃったとは言えない。だがその疑問に対する回避方法くらいは思考済みだ。

「その理由を公言するのも母親から堅く止められています」

これで完璧だ、後は佐伯さん次第……。頼む。

「そうか、つまり拓己君が欲しいのは五百円というお金としての価値では無く、その物自体が欲しいという訳だね」

さすが佐伯さんだっ！ 理解が早い。

「成程、その前提があればこの後の拓己君の大方の話は分かった。まあ、だが敢えて聴こうか？」

よしっ！ 喰いついた。後は慎重に引き上げるのみ。とは言ったもののきつと佐伯さんは分かかって僕の餌に喰いついたんだろうけど。まあそれでもこの僕の不利な状況を打破するにはこれしか無いんだ。

「そう、佐伯さんの予想通りだと思うけど。つまり僕にとってこの戦いは不毛なんだ、佐伯さんは五百円の価値が欲しい。そして僕はその物自体が欲しい。つまり何が言いたいかと言うと、佐伯さん僕と共闘しましょう！ そしてその五百円が取れたあかつきには無条件で僕が佐伯さんに五百円の価値をつまりそれと違う五百円を提供します。どうですか佐伯さんにも不利な事はないと思いますが？」

ここが最後の関門だ。実はこの条件にはデフォルトで僕に有利な要素が付いている。佐伯さんがそれに気付かなければ僕の勝利。気付いてしまえば形勢は一気に逆転されてしまう。

「成程、つまり一人で取るより二人で力を合わせればより取りやすいと。それに付け加え私は五百円の価値を保証されると」

「そうです。お互いにとっても有益です」

特に僕にとつてはね。さあ佐伯さん首を縦に振ってくれ。

「そうだな、よし分かった、その話吞もうじゃないか」

よし喰いついた。これで後は明日迄にあの五百円を取り出せれば万事OKだっ！

「ただし、私からも一つ条件を出してもいいかい？」

なにっ！　ここで条件？　まさか気づいたのか……？

「なっ？　何ですか条件とは？」

「そうだね率直に言っと、つまり拓己君には時間という足枷がある訳だよね？」

……ううっ。気付かれた……。マズイ……。

「そして私が拓己君と共闘する事によってそれをも有利に運べるとつまり条件が五分ではない気がするんだけど、どうかな？」

ダメだそこに気付かれてはコチラに有利に運べない……。それよりも今さらの共闘を破棄、それこそが今一番避けなければいけないちっ、ここは様子を見るか。

「確かにそう取れなくも無いですね。それで条件というのは？」

「そうだね、じゃあ言おうか。条件は簡単、明日迄にあの五百円が取れたならば私への成功報酬を五百円では無く二千円にしてみたい。尚この条件を呑んでもらえないのならこの共闘は破棄させてもらっ」

くっそお！　足元を見やがって、僕のタイムリミット、即ち7月8日を過ぎてしまえば何の邪魔も無く佐伯さんはゆっくり時間を掛けて五百円を取ることが出来る。つまり佐伯さんはこの後2日間を僕の邪魔だけに徹していれば時間の問題で五百円が手に入るという事。こうなってしまうえば僕の行動は一つ、成功報酬を払わずにトンづらしか無いか。本当は男と男の約束に泥を塗りたくは無かった、だけでもう背に腹は変えられない。

「尚、成功報酬は前金制にしてみたい。前言同様これも呑めぬなら共闘は破棄。つまり拓己君ならこの意味わかるよね？」

「それはあまりに横暴だよっ！　佐伯さん」

佐伯さんめっ！　細かくコチラの心理を付いて来やがる。くっそお。

「横暴？　まあ疑いたくは無んだけど、成功後の契約破棄、つまり報酬の支払を破棄何てされたらかなわなからさ。まあ言っなれ

「保険変わりだよ」

「その言い分なら僕もそうじゃないか、例えば僕が前金を払ったところでもしも佐伯さんがそれを持ってトンづら何てされたら……」

「口を慎みたまえ拓己君っ！ 君は利口な子だ今現在の自分が立たされている立場が分かっているのだろう？」

ちっ、確かに。ここは佐伯さんの条件を呑むしか無いか……。だが急に二千円何て、一体どうすれば……。

「分かりました、二千円を前金として渡ししょう。正し少し時間を頂けないでしょうか？」

「時間？ どうしたんだい拓己君？」

「なにぶん二千円は僕にとっても大金ゆえ普段お金の管理は母親に任せてあるんです。だから母親が帰ってくるまで時間を頂けないでしょうか？」

「よし分かった。そういう理由なら待とう」

ふう。これで何とか時間を稼げた。確かに報酬に二千円は大きいけど、それよりもまずは命を繋げる事が大事だし、それにお小遣いがUPしたならその二千円も大して痛くはないだろう。後は母親をどう騙して二千円を手に入れるかだ。

― 7月6日 17時30分 ―

母親帰宅まで後30分……。

6日目 定められし運命、その名は佐伯！（後編）

この30分で出来ることは全部した、後悔はないっ！ もしものタメの根回し、母親に財布を開かせるタメの理由。僕がとるべき行動、その全てが僕の誇り。誰が何と言おうと。

—きくんくんかくんくん—

—7月6日 18時00分—

「おやつ？ バカ息子こんなところで一体何をしてるんだい？」

時間通り。さすが僕の母親、時間に忠実だ。自販機の前で僕と佐伯さんはダイソンを見回す、もちろんドコか壊れたワケでも無い、これが僕の作戦の一手目なのだ。そしてそこに帰宅した母親が僕に声をかける。よしっ、後は手はず通りやるっきゃないっ！

「……やあ、母さんか。おかえりなさい……」

ダイソンから目をはなし後ろに立っている母さんに視線を向ける。ここは少し意味深に機嫌を落としながら。

「どうしたんだい？いつものバカ元気が無いじゃないか」

どんな時でもバカ元気っ！確かに僕を一言で表すとこの言葉を置いて他無い。その僕が落ち込んでいる、こんな忍者でも仮にも母親だ心配の一つくらいはして当然だろう。

「……いや、ちよつとね……」

さらに意味ありげに間を置く。すると母さんが僕の後ろでダイソンをいじっている佐伯さんを気にし出す。うん、ここまでは順調だよ。そして僕も母さんの視線につられて後ろを振り向く。

「あのね母さん……」

そしてゆっくり上目遣いで母さんに視線を戻す。完璧だ、正にシナリオ通り。

「……、少し相談があるんだ。ここじゃ話にくいから一回家に戻りたいんだけど」

役者だっ、正に役者。今年のレッドカーペットに名乗りを上げてもいいくらいの名演技。これにはいつも冷酷な母さんも優しくならざるお得不いだろう。

「そうかい、何か訳がありそうだね。それじゃあ中に入るかね」

よしっ！ 完璧。少し佐伯さんを気にしながらも家に入っていく母さん、そしてその後をとぼとぼと追う僕。

「おいっ！ ボウズ、しっかり母ちゃんに頼めよ」

家に入る間際、絶妙なタイミングで佐伯さんが一言僕に告げる。もちろんこれも作戦の内だ。

「分かりました。すいません、ちょっとお待ちします」

佐伯さんに向かい一礼して家に入る。よしっ、後は母さんとの直接交渉だけだ。ここからは本当に慎重にいかなくちゃ、一歩間違えば気絶させられて全てが台無しになってしまふからね。改めて自分の作戦を思い浮かべながら母さんに続いてキッチンのテーブルに座る。

「それで話つてのは何だい？ あんたがそんな顔をするなんて余程の事なんだろうね」

母親が優しいめの口調で問いかけてくる。よしっ！ 出だし好調。しかも僕が話し易くなるような言葉を使つて。この母親やはり出来る……。

「母さん。何も聞かずに2000円を貸してくれな——」

『却下っ！』

あれ？ デジャヴ？ 後ふた言を言わせてくれない……。

「却下と言つか、それ相応の理由、つまり話を聞かなきゃ判断出来ないね。あんたの状況を見れば訳があるのは分かっているんだ。さあ何があつたのか話なっ！」

少し圧力のある母さんの言葉に僕は考える振りをする。すると焦れたのか溜息を吐きながら母さんが口を開く。

「はあ。ほら怒らないからちゃんとお話し、黙ってちゃ埒があかないよ。外の人も関係しているんだろ？」

その言葉に少しの反応を示す僕。もちろんこれも作戦の内だよ。そして先程から塞ぎ込んでいた口をここのようやく開く。

「実は……。表に置いてあったダイソン何だけど、僕が誤って壊してしまったんだ……。そしたらダイソンの前にいた人、佐伯さんっていうんだけど、佐伯さんが弁償しろって」

黙って僕を見つめる母親、間違えた。黙って僕を睨みつける母親。もちろん疑っている模様、いつもならここでプロレス技をかけて拷問だろうけど、今日は違う。理由は簡単、表にいた佐伯さんを母親が見ているからだ。多少の真実を入れた嘘、さすがの母親もこの状況じゃ取り敢えず様子見といったところだろう。

「幸いにも本体が壊れたんじゃないかなかつたらしく、修理に出せば4000円もあれば治りそう何だつて。それでその修理費を二人で折半で2000円つて事になったんだ。だからお願い母さん僕に2000円を前借りさせてくれないかな？」

ひとまずこれで全ての種を撒いた。後は少しずつ刈り取ってい行くのみ。しかし何だろう……。この違和感……。母親の出す雰囲気。が僕の思考に何かを訴えかける。何か見落としているのか……。

「拓己よ、一つ聞いてもいいか？」

ゆっくりとした口調で僕に問いかける母さん。何て重圧だ……。ただ目を見られているだけなのに喉元に刃物を突きつけられている気分だ……。

「なっ、何だい母さん？」

そして再び母さんがゆっくりと口を開く。

「何で自動販売機の前でダイソンなんか使ったんだい？」

……。しまったっ！ 確かにそう言われてみると……。どうする、その質問は計算外だよ。五百円拾うためだよ、何て口が滑っても言えないし。どうする僕……。

「あのお、そっそれは」

「うん、それは？」

「あのおゝ、じつ実はあゝ」

「うん、実は？」

「あのおゝ、かいつまんでいいますとおゝ」

―ガシッ―

またしても見えなかった。気づけば目を見開いた母親の顔が目の前にあった。僕の首元は母親の片手で鷲掴みにされ足が地面から少し浮いていた。ヤバイどのみち殺される。この時僕の生存本能が口を開かせた。

「話します。話します。実は佐伯さんは自販機の清掃員で週に一回掃除しに来るらしいです。あっ！ やっぱ嘘です、今の嘘です。ごめんなさい、知りません。ホントは何でダイソン持って来てたのか僕にも分かりません」

とっさに出た嘘。でもさすがに無理があった。なのでここは知らぬ存ぜぬで押し通そう、でも無意味な嘘を吐いたんだ、母さんはこれでさらに怪しんだろう……。大丈夫かな……。

『拓己っ！』

母さんがいきなり怒鳴り声を上げた。ヤバイ殺される……。

「はいっ！」

僕はぐっと目をつぶり死の恐怖に耐えながら母親の言葉を待つ。

『何故嘘をついた』

ヤバイ、何かイヒ来い、頼むからイヒ来て！

―イヒっ！―

イヒがあゝ、拓己の頭にいゝ、キタ

(。 。)

!!!!!!!!!!

「すみませんっ！ 母さんに疑われるのが嫌で、ダイソンを使って

いた理由を知らなかったら疑われるかな？　そう思ったら嘘を吐いてしまいました、ほんとすいません」

僕の断末魔の叫びに似た弁解が終りを告げ、その後幾秒かの時が過ぎた。死にたくない、死にたくないよっ！

「ふう」

——とんっ——

母親の溜息の後、僕は床に下ろされた。

「はあ、はあ、かつ母さん？」

僕は探り探り母親の顔をのぞき込む。すると母親は僕の怯えた目を見るなりテーブルに置いてあるバッグに手を掛けた。

「ふう、どうして家の男どもは揃いも揃ってバカばかりなんだろうね」

そう言うつと母親が財布から2000円を出し僕の前に突き出した。どうやら母親は僕の話を利用してくれたと見て良さそうだ、僕は胸を撫で下ろしながらその2000円に手を伸ばす。

「拓己！　嘔吐してたら覚悟は出来てるだろうね？」

僕の手が2000円を掴む間際、母親からもう一度念を押される。ごめん母さん……、でも僕にはこれしか方法が無いんだっ！　母親の気持ちを考えると心が痛む、だけどその母親に殺される可能性がある以上、背に腹は変えられない。ここは心を鬼にするべきだ、そう言い聞かせ返事をする。

「もちろんだよ、母さん。母さんの恐ろしさは僕が一番分かっているんだ、嘘は吐けないよ」

ごめんね母さん。もう一度心の中で母親に謝罪し2000円を受け取る僕。

「ほらっ、佐伯さんだったっけか表で待ってるんだろ。さっさとそれを持ってお行きよ」

母親のその言葉を聞きキッチンを後にする僕。キッチンを出ると

ふと母親の溜息混じりの言葉が聞こえた。

「ほんとにバカだね、あの子は……」

そして僕は玄関を出て佐伯さんの元に向かった。去り際の母さんの一言に疑問を抱きながら。

― 7月6日 19時00分 ―

母親との文字通り命がけの死闘の結果、見事手にした2000円それを握り締め僕は佐伯さんの前に立った。

「ほうつ、拓己君。どうやら手に入れる事が出来たみたいだね」

佐伯さんの視線が2000円を握った手に向けられる。

「佐伯さん。この2000円は僕が命をかけ、最愛の肉親を騙し手に入れたお金です。もちろん佐伯さんならこの重み分かりますよね？」

最愛とは少し言い過ぎたが、母親を騙して手にした事に変わりはない。僕は佐伯さんに渡す前に今一度念を押す。

「今日はもう遅いですし母親も帰宅しています。なので作戦開始は明日からにしましょう。幸いにも明日は土曜日なので学校はお休みつまり朝母親がパートに出かけた後なら行動出来るって事です。だから明日の10時にここで待ち合わせにしましょう」

僕の言葉に自信満々の顔で頷く佐伯さん。本当に来てくれるかな……。僕は多大な不安を抱えたまま2000円を差し出す。もうこうなってしまう後は信じて佐伯さんに賭けるしか無いからだ。

「いいですね、佐伯さん絶対ですよ。明日待ってますから。僕ずっとなんかここで待ってますから」

最後にもう一度念を押して2000円を手渡す。

「分かっているよ拓己君。男と男の約束だ」

その言葉を聞き僕は大きく頷き家へと戻る。玄関の扉を開け中に入ろうとした時、ふと視界に佐伯さんが入った。

「……佐伯さん。また明日」

僕の目に映った佐伯さんは右腕の裾を捲り僕に対し後ろ向きに立ち、その捲くつた右腕を高く上げていた。そしてその上げられた右手首には仲間の印が書いてあった。

「仲間か……」

そう呟き僕は家に入っていた。自分の部屋に戻ると気付いた事があった。それは僅かだけど明日の不安が消えていたのだった。もちろん全てを信用出来た訳じゃないけど、佐伯さんのあの右腕……、いやワン〇ースの尾〇先生は信用出来るんじゃないか。そんな気がしたからだ。

お小遣いUPまで後2日。現在の所持金0円。

7日目 僕とパスと佐伯さんと忍者の七日間戦争（前編）

7日目

―7月7日 09時00分―

「それじゃあ行ってくるよ。ほんとに珍しい事もあるもんだね、拓己が早起きして見送りなんて」

玄関を開けると同時に母親が振り向き僕に告げた。それに対して僕は笑顔で返す。

「僕だつてたまには早起きくらいするよ。そんな事より早く行かないと時間に遅刻してしまうよ母さん」

母親の出勤時間。もちろん休日こんな早い時間に僕が起きているなんて普段はありえない事、つまり母親が驚くのも無理は無い。疑いながらも時間を気にしてパートに向かう母親、それを笑顔で見送る僕。そしてココからが本当の戦い……。一度準備の為に部屋に戻る。

「佐伯さんとの約束は10時、来てくれるよね……」

少しの不安を払いのけるように今日の自販機との戦いをシミュレートする。

「よしっ！ 二人が揃えば絶対にいけるぞ」

確かな手応えと共に作戦で必要とされる道具を用意し時間を潰す。そして……

―7月7日 09時55分―

逸る気持ちを抑え切れなかった僕は約束の時間前に自販機の前に立っていた。

「僕を卑怯者だと呼ぶかい？」

自販機に問いかけた僕、もちろん自販機は沈黙を続ける。

「一人ではどうにも出来なくて、仲間を増やした僕を。だけど僕にはもう今日しかないんだ……。僕を罵ってもいい。なんとわれようと僕は今日君を倒して約束の五百円を必ず取り出して見せる」

僕意思表示にも似た宣戦布告を経て時は満ちた。そう約束の時間、佐伯さんの待ち合わせの時間だ。

―7月7日 10時15分―

「泣いて何かいないんだからねっ！」

頬を伝う涙を拭い自販機を指す。もちろん自販機は無反応。約束の時間は15分を過ぎていた。

―遡ること15分前―

大丈夫きつと来てくれる……。さて、僕は直ぐにでも作戦に入るように持ち物の最終点検でもしないと。

―遡ること10分前―

もう佐伯さんってば。山手線は遅延があるから予め時間前に着くように家を出なきゃだめだよっ！ 遅延証明書ちゃんともって来なくちゃ遅刻扱いにしちゃうぞ。何てね、うん大丈夫、大丈夫、きつと電車の遅延だから。佐伯さんは約束を破る人じゃないから。

―遡ること5分前―

こらっ！ 心配したんだぞ。何？ 来る途中に倒れてる人がいてその人を助けてたら時間過ぎちゃったって？ それなら連絡の一つ

でもしなくちゃ駄目だぞ、何てね、うん大丈夫、大丈夫、きっと産気づいて倒れている人を助けてるだけだから。佐伯さんはそういう優しい一面を持った設定だから。佐伯さんは約束を破る人じゃないから。

―再び戻って 10時15分―

「泣いて何かいないんだからねっ！」

頬を伝う涙を拭い自販機を指す。もちろん自販機は無反応。約束の時間は15分を過ぎていた。

「……、遅い……。まさかね、まさか……」

口では認めてはいないが、そろそろ覚悟を決めなければいけないかもしれない。そう佐伯さんが裏切ったという事実を……。

「さてと……。準備しなくちゃ……。時間もないんだし」

心の奥にスッポリ穴が空いた感じ、なんとも虚しい感じ、それでも僕は自分を奮い立たせなければいけない。時間は刻一刻と迫っているのだから。

「やあああるぞおおお！」

そして僕は立ち上がり、涙を拭い独りっきりで最後の決戦を始めた……。

―7月7日 10時25分―

まずはこれだっ！ 準備を終え自販機の前に立った僕は洋服を着替えていた。頭には黄色いカチューシャ、そして白と青の少し変わったセーラー服、もちろん左腕には団長のワッペン。

「このままじゃダメだ。そう思ったのさ。ここからは心理戦で行く覚悟はいいな」

良く考えれば簡単な話。今までの僕の作戦の失敗、それはつまり外部的な目標との接触を図っていたからだ。そして僕は考え方を変

えた。そう外部的な接触じゃ目標を捉えられない、ならば内部的な刺激を与え、むしろ五百円の方から歩み寄らせればいい。そこで持ち出したのがこれ。

「遅れたら許さないんだからっ！」

知る人ぞ知る、涼宮ハ○ヒのコスプレ。このご時世ツンデレとかした僕の行動に惹かれない五百円何てこの世には無い。つまり僕がこの姿でツンとデレを巧みに使い分け五百円の気をそる。後は簡単、心も体も僕の虜となった五百円を誘い出し自販機の防御を自ら抜けてきた所を捉える。完璧だ……。後は上手く五百円とのラブコメを勧めればいいだけだ。

―第1ラウンド 五百円VS涼宮 拓己 10時30分―

「涼宮 拓己いくわよ」

まずは第一印象これが大事だ。少しツンを出しつつもしゃがんだ時に見える可愛いらしいパンティー、ここでグツと五百円玉の気持ちを引きつけるぞ。

「もうっ！ そんなとこに隠れてないでいい加減に出て来なさいよっ！」

自販機の前で腰に手を当て少し前かがみに下を向き右指を立てながら五百円に向かい一声。この時点で自販機の下に隠れている五百円、それを迎えに来たツンデレ少女設定の完成だ。

「あんたってばいつも自分に都合の悪いと黙り込むのよね、ほんつと昔から変わらないんだから」

後ろを振り向き自販機に背を預けその場で溜息を尽きながら腕を組む、もちろん視線は空を見上げている。そしてこの一言で幼馴染キャラの完成だ。

「何？ 別に俺の事何てほっとけばいいじゃんですって？ べっ！

別に私は五百円の事が心配で来たわけじゃないんだからねっ！
かつ、勘違いしないでよね」

慌てた様子でツンの部分を出す。完璧だ、まさにハマリ役だ。

「何？ そんな事分かってるですって？ 五百円のバカっ！ もう五百円何て知らないんだからね」

（私の気持ちなんて何も分かってないじゃない……）

五百円に聞こえるように小声で呟く、そして五百円の顔も見ずにゆっくりその場から立ち去る。ミッシェンコンプリートだぜ。こんなに後を引く用な言い方をされたらどんな成人男性でもイチコロだ、これで後を追ってこないような不抜けた男性なら逆にこっちからお断りだよ。暫く歩き家の前で立ち止まる僕。振り向き様に言うセリフは持論決めてあるよ。そして僕は勢い良く振り向いた。

「もう着いて来ないでよっ！ 五百円のバカっ！」

目薬も射してある完璧だ、そしてグツと瞑った目をゆっくり開く、もちろんこれも演出の一つだ。そして照れながら僕の涙を拭く五百円……………。

「って、誰もおらんやないかい」

もちろん僕のツンデレに失態は見られなかった。恋愛シミュレーションゲームだったら間違いなく『後を追う』って選択肢を選ぶだろう。なのに何故五百円は着いて来ない……。

「はっ！ あっ……、あれはっ」

ドジっ娘メガネ図書委員……。そういう事が、つまり僕の五百円はドジっ娘メガネ図書委員とかした自販機によりあの場でフラグを立てられたということか。何て事だ、まさかあそこでドジっ娘メガネ図書委員が来るなんて……、完全に盲点だったよ。

「僕にはまだハーレムエンドは早かった、という事だったのか……。無念」

―第1ラウンド 自販機 WIN（ドジっ娘メガネ図書委員） 1
0時45分―

「クッソ！ 心理戦でもダメか……。となればもうあれしか無いか」

僕には今日までとって置いた策があつた、ただ出来れば使いたく無かつた。そうこの策にはとても大きな代償が必要だからだ。

「どの道僕にはこれしか残ってないんだ……、やるしか無いか」

覚悟を決めた。そう、その代償とは何を隠そう僕自身の腕だつた。

―第2ラウンド 自販機VS根性っ！ 10時50分―

僕は覚悟を決めると自販機の前に横たわつた。きつとこの先の戦は見るに耐えないとでもおぞましいものとなるだろう……。きつと僕の腕の肉は擦れ、骨は軋み、それに伴なう痛みに耐えながらさらに腕を奥へと進めていく。考えただけで嘔吐ものだ。だけど僕にはもうこれしか残っていなかった。命よりも大切なものは無いっ！
そう自分にいい聞かせ。

「拓己っ！ 行くわよっ！」

掛け声と共に僕の右手が自販機の下に吸い込まれていく、途中途中デコボコとした アスファルト オリハルコンのかけらに腕は擦られる。けどまだこの程度なら平気だ、立ち止まること無く僕の腕はさらに奥へと進む。

「クッ！ またここか……」

そして腕は進行を止めた。そう以前に突っ込んだ時と同じ、まず初めの進行の限界。ただ以前は後一步腕を奥へと進めるだけで指先に当たつたが今回は違う。度重なる攻防によりこの五百円はさらに奥へと進んでしまったからだ。そして僕は深く深呼吸をした。

「ブラスター1、リミットブレイクううう！」

―説明しよう―

このブラスター1、というのは拓己の身体能力を上げるとか上げないとか関係なしにただ言ってみたただけなのである。

感じる（気がする）。体中の血が騒いでいる（気がする）、これ

ならいける（気がする）。そして僕は腕をさらなる高みへと進めた。
「うおおおお！ いったいよおおっ！」

―ズリズリ―

皮膚とアスファルトの擦れる音、少し流血もしているか……。自販機の入り口が僕の骨に圧力を掛ける、少し折れているか……。？
だがまだ届かない。今の腕の場所はせいぜい以前に進めた位置とほぼ同じ。目測でも後数センチは必要だ。

「やっぱり僕には出来ないのかな……」

腕に走る痛みが僕の心をへし折る。脳裏を横切るペスの顔、これが走馬灯だね。ふと死を覚悟してしまったのか僕は腕を少しずつ引こうとした。その時、

『すまんね、待たせてしまった！ 拓己君っ！』

僕は目を疑った。だって、どうして……。あなたは僕を裏切ったはずじゃ……。僕は気付かぬうちに涙を流していた。そう目の前には佐伯さんがいたのだ。

「拓己君、今は泣いている場合ではないよ。さあ腕を奥へ、その手に掴むんだっ！」

どこからか持ってきたのか佐伯さんはその手にバットを持ち、以前の僕同様、自販機の下にもつ方を入れテコの原理で自販機を少し浮かせてくれる。僕は流れる涙を拭い佐伯さんの掛け声と共に腕を奥へと進める。

「じゃあ、せゝので行くぞ拓己君。私もあまり力がないからそんなに自販機を浮かせてはいられないと思う。勝負は一瞬だっ！」

「はいっ！」

二人の間にはいつの間にか信頼にも似たそんな友情が芽生えていた。共に戦い共に涙し共に笑う、そんな事をしてきた二人に最早合図何て必要無かったのかもしれない。そして二人の呼吸があった。

「せゝのっ！」

7日目 僕とベスと佐伯さんと忍者の七日間戦争（中編）

—がしゃん—

「はあ、はあ、はあ。たつ、拓己君？」

「ふう〜、佐伯さん。」

二人の呼吸は荒れていた。自販機を上げるのに全力ともいえる力を使い果たした佐伯さん、そしてその一瞬で五百円を確実に取り出さなければいけない僕。事が終われば一瞬の出来事だった。そして僕は疲れ切った佐伯さんにそつと近づき肩に手を置いた。

『手が？ げるかと思っただよっ！』

僕の必死のツツコミは空高く響いた。そう佐伯さんの自販機を持ち上げていた時間は僅か一秒にも満たなかったのだ。僕が腕を奥へと進めようとした頃には佐伯さんはへばった顔でバットから手を離していた、それを見た僕は一瞬で思考を切り替え腕を引いた、たぶんそのスピードは音速を超えていたと思う。

「いや〜すまんすまん。まさかこんなに重いとはおじさんもビックリだよっ！」

「こつちがビックリだよ。簡単に腕一本持つてかれるところだったよっ！」

口ではそう言っていたけど、この時の僕は全然怒ってはいなかった。確かによく考えれば腕を一本失っていたかもしれない、ただ。だけど僕はもう腕の一本よりも、もっと大切なものを貰っていたのだから。そう、友というかけがえの無いモノを。

「もう、佐伯さん。来るのが遅いよ、心配したじゃないか……」

「すまなかった……」

佐伯さんはその後の言葉を躊躇った。きっと僕の命と同価値、いやそれ以上の事を成し遂げてきた。語らずとも佐伯さんの顔がそう言っていた。だから僕も決してその後の言葉を聴こうとは思わなかった。

た。

「寝坊してしまったよ」

「返せー。僕の優しい思いやり返せー。バファリンの半分返せー」

佐伯さんの寿命は暫く預けよう……。そう、それよりも二人が揃った今もつとやるべき事があるからだ。

「それよりも佐伯さん——」

すると僕の言葉を遮るように佐伯さんは手を前に出した。

「分かっているよ。僕が持ち上げる、拓己君っ！ その隙に君がとるんだ」

二人はその場で相槌を打った。

――第3ラウンド 佐伯+拓己VS自販機 12時00分――

「さあ、始めようか拓己君」

「はいっ！」

二人は自販機の前にポジションをとった。僕は下に手を入れるために中央部に前かがみにしゃがんだ。そして佐伯さんは僕の横左にポジションをとりバットを自販機の下に入れ準備万端だ。

「そうだ拓己君始める前に一ついいかな？」

佐伯さんの真剣な視線が僕を頷かせる。何かな？ そうかきつと佐伯さんの事だ何かいい作戦でも思いついたに違いない。

「いい作戦があるんだが、どうだろうか？」

やつぱり、さすがは佐伯さんだ。確かに作戦も何もなくまた行動を開始してもさつきと同じオチが待ってるだろう、それなら佐伯さんの作戦とやらに耳を傾けるのは必然。

「で、その作戦とは……？」

僕の質問にニヤリと顔を作る佐伯さん。きっと自信アリなのだろう。

「掛け声をつけようじゃないか」

もうその時の僕には小学生かっ！ とか、リポビタンドかっ！

といったツツコミをする元気は無かった。

「そうですね。それで掛け声は何にします？ やっぱりファイトーっ！ いっぱーっっ！ ですか？」

すると佐伯さんは大きく首を振った。

「拓己君。僕たちならそんな決められた掛け声をしなくても、きつと合う。むしろそれで合うからこそ力が出るんじゃないかい？」

根拠のない自信がこの時は誇らしげに見えた。逆らったら面倒それがこの時僕の中に生まれた言葉だった。

「そうですね、じゃあ取り敢えずやってみますか……」

そして僕たちは本当に何の打ち合わせも無く自販機の前に準備した。というか本当にそんな 掛け声が必要なんだろうか？ その疑問をそつと胸の奥にしまいながら。

「それじゃあいくよ拓己君。僕が何か言うからそれに伴った返事をしてくれ、そしてその返事が僕の心とマッチしたときつと五百円は取り出せるはずだから」

「はあ……。わかりました」

まあ、要は佐伯さんが『ファイトーっ！』的な事を言うから、したら僕が『いっぱいっっ！』的なことを言えばいいのだろう、簡単な話だ。そして僕は言われるがままに佐伯さんの言葉を待った。

「よし。それじゃあいくよ拓己君」

そしてその時は来た、僕の相槌と共に佐伯さんは大声を出しながら自販機を持ち上げた。

『東京特許ーっ！』

ほら来たなんだ簡単じゃないか。そして僕は腕を奥へ進めながらそれに答えた、

『きよきやきよきゅーっ！』

ーがしゃんー！ー

「出来るかーっ！」

「拓己君全然ダメだつて。あの大事なところで噛んじゃうんだもん、おじさんも力抜けちゃったよ」

半笑いで佐伯さんが首を横に降った。僕はまたしても半笑いのおっさんのせいで簡単に腕を持って行かれるところだった。それよりもさっきの掛け声は……。

「つてか佐伯さん。こっちは必死に五百円を取ろうとしてるのに早口言葉なんて無理だよ。て言うか何そのチョイス？　今は完全に佐伯さんのミスだつて」

「そんな…、『きよきやきよきゅーっ！』つて、拓己君はどれだけ早口言葉苦手何だい。おじさん笑いが止まらないよ」

ああ、ダメだ。このひと完全にダメな人だ。関西風に言うとかアカン人だ。そして一通り笑い終わった佐伯さんが口を開いた。

「はあ、はあ。それじゃあ拓己君気を取り直してもう一度いこうか」

「はい。それよりも佐伯さんチョイスの方ちゃんとしてくださいね」

「もちろん。私に任せなさい」

かなりの不安を抱えつつまた僕と佐伯さんは自販機の前に準備した。もちろん次こそは取る、例え佐伯さんがどんな変な事を言っても必ず正しい答えを見付け出し。

「それじゃあいくよ拓己君」

そして再びその時は来た、僕の相槌と共に佐伯さんは大声を出しながら自販機を持ち上げた。

『沖縄名物ーっ！』

よし来た。そんなもの簡単じゃないか……、えっ？　何何？　沖縄名物？　へっ？　えゝ、えゝ、あっ！

『デンサー節ーっ！』

ーがしゃんー

「わかるかーっ！」

「はあ、拓己君それは名物と言うよりも民謡だからさ。違うんだよ

ねえ」

憎たらしい笑顔で首を横に振る佐伯さん。こいつ本当は僕の腕を亡き者にしようとしているんじゃない……。佐伯さんの憎たらしい笑顔はそんなことも想像させた。

「じゃあ、答えは何なのさっ！」

正当な意見だったと思う、でも正当はこの時何の力も持たなかった……。

「えっ？ 正解、やっぱり沖縄名物といえばあれだよ。シークワサーっ！」

自信満々の顔でそう答えた佐伯さん。僕は一呼吸置いて答えた。

「だから、わかるかーっ！」

もうだめだ、このままじゃ僕の腕は時間の問題だ。何とかせねば……。

「そんなに怒ること無いじゃないか。ならアゼルバイジャン共和国名物とかのほうがよかったかい？」

そんな国知りません……。

「うん、それならまだ沖縄名物でよかったよ。でも佐伯さんもう名物シリーズとか早口言葉シリーズは辞めませんか？ きつと……、いや絶対合わないし」

僕のその意見に不服そうな顔をする佐伯さん。だけど僕も引けない、ここを引くと僕の腕とは決別しないといけなくなるから。

「うーん。じゃあ逆に拓己君はなんだったらいいんだい？」

「そうですね。例えば好きな食べ物とか、昔やった遊びとか。もうちょっと僕でもわかる奴なら」

すると佐伯さんはあっ！ それ頂きつ！ みたいな顔をした。こうして何とか佐伯さんを説得し三度自販機の前に立った。後は佐伯さんが何を言うかによる、そしてその質問に対して佐伯さんの考えそうな答えを予測して答えるだけだ。よし次こそは正解してみせるぞ。

この時の僕はもう掛け声では無くクイズになっている事に気づく

事は出来なかった。そう佐伯マジックにかかっていたのだ。そしてこの佐伯マジックから抜け出せなかった僕が後悔するのにその時間はかからなかった。

— 13時00分 —

『私が幼い頃によくやった遊びといえはーっ！』
えーっ！

『かつ、かんけりーっ！』

— ガシャン —

「正解はドラフト会議でした」

「わかるかーっ！」

「じゃあ次いこう」

— PM14時00分 —

『私が今一番願っていることはーっ！』

あつ、これは簡単だ。

『五百円がとれることーっ！』

— ガシャン —

「何で違うのさ。いやいやそこは願っというよ、でっちなみに正解は？」

「正解は魔法陣グ。グルの続編希望でした」

「だからわかるかっ！」

「じゃあ次いつてみよう」

—15時00分—

『ニコニコのMYリスの一番上の動画といえーっ！』
えーっと、佐伯さんの思考を読んでっつと。

『今更ハレ晴レ。かい 踊ってみたーっ！』

—ガシャン—

「当たるわけねえじゃんかよ」

「正解はこんな澪は嫌だっ！ でした」

「はいはい。次々」

—16時00分—

「はあ、はあ。佐伯さん……？」

「何だい拓己君？」

「本当に僕に協力する気ありますか？」

「はあ、はあ。もちろんだよ拓己君」

「じゃあ聞きますけど今の問題何ですか？」

「えっ？ 今の。× #ー！ ってやつ？」

「はいっ！ 僕には何て言ったのか全然判らなかつたです」

「そうか、それはすまない事をしたね。今のは。× #ー！ って言っただよ」

「だからわかるかーっ！ じゃあ逆になんだよ、それ何て答えれば正解なんだよ」

「これかい？ やっぱり、バックトゥザフューチャーが正解かな」
……、僕は何をやっているんだろう……。もしかしてとんでもない時間の無駄をしていたんじゃないのかな……。だが気付いた時には既に遅かった。僕に残された時間は後数時間しか残されていないかった。もう時間も後わずか、僕に残された行動は一つしかなかった。

「佐伯さんっ！」

僕はその場に正座し頭を地面に付けた。日本人の最大にして最高の技、そう土下座だ。

「僕にはもう時間がないんです。どうか本気で僕に協力してもらえないですか。お願いします」

今から一人でこの状況を何とかするのは今まで散々やったんだ、もちろん無理に等しい。それならば僕は少しの希望が残っている佐伯さんの助力これにかけるしか無かった。そしてその場に暫くの沈黙が流れた。

「拓己君……。顔を上げてくれないか？」

沈黙を破ったのは佐伯さんの一言だった。そして僕が顔を上げた先にはとても真剣な眼差しをした佐伯さんが立っていた。

「すまなかった。もし拓己君がまだ私を信じてくれているのなら、私はその期待に本気で答えようと思う。だからもう一度私にチャンスをくれないか？」

「佐伯さん……」

そつと差し伸べられた佐伯さんの手がとても優しく感じた。この時僕はやっと気付いた気がした。人を本気で動かしたいのなら自分が先にどれだけ本気なのかを見せるべきなんだと。僕は差し出されてた手を強く握り返し立ち上がった。もう恐れるものなんて何も無い、隣に立っている佐伯さんの存在が僕にそう思わせた。

「さあ、拓己君。取ろうっ！　そして終わらせるんだ」

僕は深く力強く首を縦に振った。そして僕たちは自販機の前で準備を始めた。そしてその時は来た。

「いくよっ！　拓己君」

「はいっ！　佐伯さん」

二人の掛け声と共に自販機が少しその体を浮かせた。そして僕の手が下に入るか否かその時、それは起こった。

「あんだ、何してんだい？」

とても聞きなれた声、もちろん忘れるわけがない、間違えるわけ

がない。そうこの声はあの人の声だ……。

7日目 僕とベスと佐伯さんと忍者の七日間戦争（後編）

「かあさん……」

自販機から手を出し後ろを振り向くとそこには母さんの姿があった。もちろん予定外だった、今日は遅くなると確かにそう告げていたのに。

「はっ、早かったね。今日は確か遅くなるんじゃないかなかったっけ……？」

もちろんこんな状況だ平常心ではいられない、きつと僕の焦りの表情から母さんも何かある事は予想しているだろう。なんとかしなくちゃ……。

「少し事情が変わってね……、それより拓己お前はここで何をしてるんだい？」

少し考えこむように顎に手を置き母親が訪ねた。やばいやばい、どうしよう。昨日のダイソンの一件もあるし、もう下手な事は言えないし、何か言い訳を……。ダメだ何も思いつかない。

「まあいいさね。それより拓己話があるから一度家に帰って来なさい」

顔をニヤ付かせながら母親が僕に手招いた。話……、何だろう？ 佐伯さんに少し待ってとジェスチャーし、僕は言われるがままに家に入った。

「それで母さん、話って何かな？」

テーブルに腰掛け僕は恐る恐る口を開いた、未だに母さんの顔はニヤ付いていた。

「ふう、あんたが何を隠そうがこのさいだ、ここでそれを追求したりはしない。まあそれを踏まえた上であんたに少し頼みがあるんだがもちろん聞くだろう？」

ここに来て頼み？ 正直に僕にはそんな頼みを聞いている暇はない……、でも母さんの口ぶりからするにここは聞いておくしか選択

肢はなさそうだね。

「わかったよ、それで頼みって何かな？」

「私は今から少し行くところがある、その間拓己にはそこに書いてある物を買って来て貰いたい。いいな？」

僕はテーブルに置いてある紙を取り領いた。そして母親が家を出たのを確認し僕も家を出た。

「拓己君……、話つてのはなんだったんだい？」

家を出ると目の前に佐伯さんが立っていた、僕は手に持った買い物かごを佐伯さんに見せ事情を説明した。

「そうかい、分かった。私が何とかしてみるから、拓己君は急いで買い物が終わらせてきてくれ」

力強い佐伯さんの言葉を聞き、僕は買い物に出かけた。

— 18時00分 —

急いで買い物が終わらせた僕は息を切らせながら慌てて家に戻った。

「はあ、はあ。佐伯さん、今終わったよ……」

— ドサッ —

買い物かごが僕の手から落ちる音だった。何で？ だって……、何処にいちやったの……。自販機の前に佐伯さんの姿は無かった。

『佐伯さんっ！』

あたりを見渡しながら僕は大きな声でその名を呼んだ、それでも返事は無かった……。

「何でだよ、どうしてだよ、佐伯さん……」

悔しさや悲しみ、色々な感情が僕の中を駆けまわった。悲しみでその場に泣き崩れてしまおうか、でもそれじゃあ何も解決しないことは分かっている。悔しさを怒りにして暴れまわろうか、それも何も

解決しない。僕は何かもをグツと堪えて立ち上がり自販機の前まで移動した。

「お前のせいで……、お前さえ……」

僕は自販機の前に寝そべり、手を奥へと進めた。今まで腕を引きずるたびに感じていた痛みは何か凌駕したように感じなくなっていた。

「くっそお！ 何で取れないんだよっ！ 後少しなのに。お前さえ、お前さえこんな所に入らなければよかったのに」

自分でも驚くほど感情は高ぶっていた。悔しさ、悲しみ、全て抑える事が出来なかった。だけど感情とは別に圧迫され続けている腕はとうとう限界を迎えた。

「バカ息子っ！ いつまで人を待たせるんだい」

その言葉と同時に僕は腕を引きぬいた、もちろん五百円は取れていない。ただ腕が限界だったために引き抜いたのだ。僕はその場に座り込んだ、すると後ろから声をかけた母親が落ちている買い物かごを拾い僕の前に立った。

「バカ息子が、買い物一つ出来やしないのかい」

母親の罵声が響いた。そして真剣な眼差しで僕を見つめながら話を続けた。

「あんたも男だろうが。何があつたか分からないし、聞きもしないさね。ただ男が簡単に泣くんじゃないよっ！」

見られないように後ろを向いていたけど、気付かれていたみたいだ。ずっと、佐伯さんがいなくなつてからずっと堪えていた涙が溢れていた。

「何も知らないくせに、うるさいっ！ うるさいっ！」

初めてかもしれない、こんなに本気になって母親に感情をぶつけたのは……。するとそれを見た母親の表情が少し和らいだ。

「拓己……」

僕を見つめる母親の眼差しは初めて見せるものだった、とても、とても優しく感じた。

「お母さん……」

僕の前に優しく手をさし出してくれた。そしてその手をおもいきり後ろに引き、反動で出てきた反対の手、なぜか拳を深く握っていた。

『母親に五月蠅いとは何事じゃーっ！』

その拳はスピード体重申し分無し、僕の顎を見事に打ち抜き、脳を揺らした。もちろん僕はその場に気絶した、ただ一言を残して……
「ご、ごめんなさい……」

約束の日 終決、僕の七日間戦争

約束の日

―7月8日 07時00分―

「拓己っ！ いつまで寝てるんだい、早く降りてきなさい」

その日の朝日が僕にはとても眩しく、とても愛おしく感じた。それもそのはずこの朝日が僕にとって最後になるかもしれないのだから。母親の大きな声で目覚めた僕は顎に残る僅かな痛みを伴い寢床から起きた。

「朝……、そつかあのまま僕は……」

自分の部屋に寝ていた事を考えると、きっと母親が運んでくれたんだろう。自分でも驚くほど冷静だった、すんなり覚悟も決まった。僕は母親の待つ一階に降りた。

「おはよう、母さん」

僕は母親の真向かいの椅子に腰掛けた。トースターでパンを焼いているのか、こんがりといい匂いがする。キッチンに置いてあるフライパンの上には綺麗な円形の目玉焼きが置いてあり、まな板の上にはきゅうりやハムなどが並んでいた。僕は母親の作るサンドウィッチが大好きだ。

「このバカ息子が。いったいいつまで寝てるんだい。まあいい、それよりも拓己覚えているだろうね？」

うん、もう覚悟は出来てるよ、母さん……。

「五百円の事だね？ もちろん覚えてるよ」

「そうかい、それじゃあ早速見せてもらおうか？」

母親が僕の前に手を差し出す。正直に言っただっ！ 落とししましたって、覚悟は出来てたはずなんだ、後は言うだけなのに、なのに

僕の口は重くまるで縫われたように開かなかった。その場に暫くの沈黙が続いた。

「ふう」

母親は大きく溜息をついた。そして呆れたように話し始めた。

「はあ、このバカ息子が本当に仕方ないね。ホラっ！」

すると母親は右手に握っていた物をテーブルの上に放った。そしてそれはテーブルの上を転がった。

「母さん……、どうしてこれを……」

動きを止めたそれを僕は凝視する。どうして、何で母さんがその五百円を持っているの……。そこには動きを止めた指紋付きの五百円と十円が2枚あった。

「あんたが自販機の下を漁っているのは知っていたね。ほんとに馬鹿な子だね」

そっか、全部知っていたんだ。そりやそうだよ、あんなだけやればどんなバカでも気付くよね。何だ、それなら話は簡単だ、後は母さん次第って事か。

「そっか。それで……、それで僕はどうなるの？」

「もちろん約束は約束、お前にはタンパク質の塊になってもらおう——と言いたいところだが、まあかたちとして五百円は手元にはある訳だし。少し私の事情も変わってな、お前がある条件を呑んでくれるならもう一度チャンスをやろう」

えっ？ えええっ？ 本当に？ 僕の命はまだつながるの？ やっほーいっ！

「もちろんっ！ 条件なんて呑むよ」

すると僕の返事を聞いたやいなや母親は軽くほくそ笑んだ。

「よしっ！ そうと決まれば話は早い。ほら、こっちにおいでなさい」

そう言つと母親は居間の方に声を掛けた、すると襖が少し動き間から小さな女の子が顔を出した。誰だろう……、見たことないや。極度の人見知りなのか顔半分を覗かせその場から出ようとしない。

なかなか出てこようとしない女の子を見かねたのか母さんはその子に歩み寄っていった。

「ふう、ほら何もとって食いやしないからこっちおいで」

襖の前でその子に向けて手を差し出す母さん、その手を臆病に掴む女の子。見ているこっちが微笑ましくなるような光景だ。

「さあ、自己紹介をし」

僕の前に連れてくるとその子は母さんの後ろに隠れてもじもじと体を揺らした。きっと恥ずかしいんだろう、こんな時はお兄さんである僕が積極的に歩み寄ってあげなくちゃ。僕はその場にしゃがみ女の子と視線を合わせた。

「ねえ。お名前は何て言うのかな？ よかったらお兄ちゃんに教えてくれないかな？」

完璧だ、何て完璧なまさに理想的なお兄ちゃんの姿だ。僕は優しく微笑みながら女の子の頭を撫でた。すると恥ずかしそうに顔を俯かせていた女の子の口が少し動いた。

「……く、……るな」

うん？ まだ照れていたのか、女の子の声は小さく僕の耳には微かにしか聞こえなかった。

「ごめんね、あまり良く聞こえなかったよ。もう一回教えてくれな
いかな？」

するとその女の子は俯いていた顔を上げ可愛らしい笑顔で答えてくれた。

「風伊奈……、山本 風伊奈です。10歳です……、4年生です」

女の子の名前は風伊奈ちゃん、可愛らしい笑顔がとても似合う4年生の女の子、少し照れ屋さんなところが子供らしくてまた可愛い。2次元好きの僕にとってはまさに理想の妹だっ！

「そっか風伊奈ちゃんか……、僕は拓己。呼ぶときは拓己お兄ちゃん、またはお兄ちゃん、そしてお兄様。どれでもいいからね」

決して違う、僕の欲求を満たそうとしているわけじゃない。

「うん……、じゃあ風伊奈お兄ちゃんって呼ぶね」

我が生涯一片の悔いなし。もう死んでもいいかも。過去散々この母親には痛めつけられてきたが今日はなんという日だ。その母親が僕に天使の笑顔をくれた。それにしても風伊奈ちゃんも少し慣れてきたのかな、いつの間にか母さんから離れ僕の前に姿を見せてくれた。素直で本当にいい子だ。

「ほらバカ息子、いつまでニヤついてるんだい」

母さんの声に顔を引き締める僕。そうだ、死を回避する条件＋お小遣いUPの条件を聞かなくちゃ……、でも風伊奈ちゃんの笑顔を見ただけでどうでもいいかも。

「それで母さん、条件って言うのはなんなの？」

もちろんお小遣いがUPするのは大歓迎、一応聞いておかないからね。

「条件は簡単さ、暫くこの風伊奈を預かることになったから、その間あんたがこの子の面倒を見てやっておくれ」

「……えっ？ あっ、まあ面倒みるのは全然大丈夫だけど暫くの間って……？」

「五日間だっ！」

母親が言うにはパート先の人、つまり風伊奈ちゃんのご両親に急遽用事が入ってしまった今日からの五日間風伊奈ちゃんを家で預かることになったらしい。風伊奈ちゃんみたいな可愛くて素直な子の面倒を見るなんて、妹が欲しかった僕としてはまさに夢のようなプランだから全然苦ではない、それに加え風伊奈ちゃんの面倒を見ればお小遣いも上がるというなんとも棚ボタな話だ。

ただ一つ条件として風伊奈ちゃんが帰る時、つまり五日後に母さんが風伊奈ちゃんに五日間の感想を聞きその感想がいいものであればお小遣いUPという条件だ。つまり僕が理想の優しいお兄ちゃんを演じていれば何も問題ない、というか上手く行けば念願のあの言葉、
『お兄ちゃんだいすきっ！』

何て言葉さえ聞ける可能性があるのだ。こんな好条件、ああ神様ありがとう。

「と言う訳で。早速なんだが風伊奈を学校まで連れて行っておくれ。私はもうパートにいかなくてはいけないからね。それとバカ息子、あんたあの佐伯さんって人に感謝するんだね、あの五百円持ってきてくれたのはあの人さね。あんたの命の恩人って事だ」

母さんはそう言い残し家を出た。佐伯さんのおかげ？ 僕を裏切ったはずなのに……、僕は真意を確かめたく母親の後をおい家を出た。

「母さんっ！」

外に出ると母親の姿は既に無かった。まあ、帰ってきてからでも聞こうかな。僕は振り返り家に入ろうとした、その時僕の目にあるものが飛び込んできた。それは自販機の隣に置いてある空き缶を入れるゴミ箱だった。僕の目についたのはその中であつた一つのビール袋だった、何でこんなに気になったのかは分からない、ただ何か僕を呼んでいる気がした。僕はゴミ箱の元に走りその袋を手にとった。

「佐伯さん……ごめんなさい。それとありがとう……」

その袋の中にはマジックハンドの空箱とそれを買った時のレシート、1980円お買い上げと写されたレシートが入っていた。本人に聞かなくても分かる、僕はその空箱を抱きしめポケットに入っていた二十円を握り締めた。

「なんだよ……、残りの20円まで僕に渡しちゃったら佐伯さんの利益何てないじゃないか……。本当に嫌な人だな……、僕にお礼の一言くらい言わせてくれてもいいのに」

晴れ渡った朝の風景に、それは綺麗な、綺麗でとても爽やかな涙の雫が一つこぼれ落ちた。

「また、会えるよね。佐伯さん」

僕は眩しい朝日を横目に一言呟いた。そしてその場を後にした。

家に入るなり僕は新規一転、風伊奈ちゃんの元に駆け寄った。

「さて、じゃあ風伊奈ちゃん今日から五日間よろしくねっ！」

この七日間色々な事があった、佐伯さんというかけがえのない人との出会いや、友情、まあ途中何だかんだあったけれども今にして思えばいい思い出だった。

こうして僕の七日間は終りを告げた。そして新たに天使のような風伊奈ちゃんと過ごす天国のような五日間が始まるうとしていた……。

「おいっ！ 拓己、こらっ、気安く話しかけんなよ」

……んっ？ あれ？ おかしいな……。いやいやそんなハズな
いって、聞き間違いだって

「ごめんね風伊奈ちゃん？ お兄ちゃん今聞こえなかったよ、今何
て言ったのかな？」

「だからっ！ 気安く私の名前を呼ぶなよ、バカがうつるだろうが」
……。

こうして僕の七日間戦争は終り、幸福の五日間が始まると思っ
ていたのに……。

どうやらまだ僕の戦争は終わっていなかったみたいだ……。

次回予告！

『僕と風伊菜の五日間抗争』

次回作は拓己と突然現れた二重人格少女風伊菜の抗争を描いてお
ります。

今回同様、拓己にはそれなりの足枷があり。それを利用する風伊
菜。

時には殴りあい、時には泣きあい、時には笑いあふ。
そんな物語でございます。

完成まであと少し、お待ちください。

それまでは~~~~~。

c a t a s t r o p h e F A T E 最新作

『L I F E』

一人の少女の人生を描いた物語。

こちらを是非お読みください！

人物紹介！！

拓己^{たくみ}

物語の主人公。超絶生命体たる母親を持ち、父親は現在不明。

バカで真っ直ぐな性格をしている、実は隠れオタクでもあり妹信者である。

愛犬のぺすとは唯一無二の親友である。

母親（名前は現在不明）

拓己のははであり、アサシンでもある。

どんな屈強な理屈をも力でねじ伏せる事が出来る。そんな超パワー系な一面とは裏腹に拓己の一番の理解者でもある。現在はスーパールのパートを行っている。

愛犬^{ぺす}

金髪幼女好きのいぬ、拓己のパートナーだ。

佐伯^{さえぎ}

拓己の最高のライバル。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4323o/>

『仮 僕の七日間戦争』

2011年9月14日03時32分発行